せられた。固より書道を以て採用を願ふたほどであるから、直様筆とつて用を果すかと思ふたに、是は如何なこと、額を撫でゝ後込をした彌兵衛、

「實は、其の何で……拙者、誠に無筆でおざつて、御用に立つほどの手を持ちませぬで……」

筆もとらずに、額を撫でる許り、是を聞咎めた御右筆頭は、此の横着者がと云はぬばかりの顔をして、

「ナニ、無筆でおざると、これは怪しからぬ、書道を申立てゝ御登庸に預りながら、今更其の手を持たぬとは、近頃以て甚だ其の意を得ぬ」

と詰つた、彌兵衛はます〳〵恐縮して、

「如何に泰平の御代とは申しながら、何一つ出來すことなく、御奉公も祿々勤めず、御扶持を頂戴いたすこと、先祖に對しても相濟まぬと存じ、實は出來もいたさぬ書道を申立つて、御右筆の末席を穢し、上を欺き奉る段、誠に早、

何とも申譯おざらぬ」

重々恐入つたのである。しかし、其の實は、決して無筆でも惡筆でもないのだが、彼の質直なる性情から、惡く言へば一種の變屈だが其の性質から、何うにも斯道の心得があるぞと云つて、自ら烏滸がましく筆を執るは、彼の爲し得ぬ所であつたからである。

彼が、決して惡筆でも何でもないと云ふ證據は、今現に泉岳寺にある、刷毛屋の看板を見ても分る、中央に「京」と書いた一大字、右に「上のはけ」左に「色〻おろし、」下に「彌兵衛」と書いた其の達筆、なか〳〵以て惡筆どころの沙汰ではない、斯う云ふ風な性質であつたから、長直公も深く其の淡白を喜ばれて、前よりは一層目を掛けられたと云ふ事である。彼は又、平素節儉を旨として、當時元祿時代の奢侈になじまず、自家の愛用する乘馬の如きも、絶えて人まかせにするやうな事はなく、何時も手づから水を浴はせ、妻女には其の食を炊がせたと云

ふ。此の一事によつても、其の人の嗜は、歴々として目に睹るやうであらう。

此の彌兵衛に、一人の男子と一人の女子とがあつた。其の男子は、名を彌一兵衛と云つて、生れついての美少年、所謂白面青顔紅耳朱唇の少年であつたから、彌兵衛の喜びは人一倍、加ふるに、怜悧の性質であつたから、まだ成童に達せぬ中、はやくも文武両道に秀でた一藩中の譽められ者となつたので、両親の喜びは並一通のものではなかつた。來る人毎に悴の自慢で持切りの有様であつた。當時、彌兵衛が親類の者の所へ送つた書面の中に、

我等男子は彌一兵衛一人にて、殊に悧發に生れつき、第一我等夫婦の申す事一度も背きたる事ござなく、其の上、諸藝器用にて、家中の者共も、親よりは抜群に生れ増したると、在所までの評判、旦那もよく聞き入り居られ候と、沙汰もこれあり、彌一兵衛殊の外成人いたし、我等よりせいも高くなり、おとなしく候故、十二月十四日に元服いたさせ、彌兵衛より一倍大人にも成り候やう

にと、祝申し候ひつゝ……」

とあるのを見ても、如何に鍾愛したかが解る。所が、此の彌一兵衛が母方の者で、本多喜平次と云ふ浪人があつた、此奴、素行が修まらないので、近親にも見放されて居つたが、遂々彌兵衛の家へ轉がりこんで厄介になることゝなつた。始めの中こそ、喜平次も神妙に身を慎しんで居つたが、狎るるに從ひ、次第に持つて生れた地金を出して、堀部一家を困らすことも度々であつた。然るに、彌一兵衛が方に十五歳、花も耻らふ其の姿に、何時か思ひを通はし、つけつ廻しつ、口説き立つて、我が意に從はせやうとした、男色は當時の流行であつたから、好色者の喜平次、頻りと心を碎いて、彌一兵衛を何うにかして、自分に靡かせやうとしたが、少年でこそあれ彌兵衛の悴彌一兵衛だ、父に劣らぬ氣慨の男兒であるから、是を苦々しき事に思ひ、折を見て一發肘鐵砲、強藥の玉を込めて散々に耻かしめたから、流石の喜平次思ひを達し得ず、何うにも斯うにも其處に居られなく

なつた。ところが、適はぬ戀の意趣ばらしと云ふ奴で、此の喜平次め深くも是を怨み可愛さあまつて憎さが百倍の譬に洩れず、何うで此家を退くなら、行きがけの駄賃に彌一兵衞もと、或る夜のこと、彌一兵衞が机に向ひ、何やらん頻に讀書に耽つて居る隙を窺つて、大刀に反を打たせ、物をも言はず、理不盡にも右の肩先から乳の下かけて、發止、袈裟がけに切り付けた、普通大抵の者ならば、キヤッと一聲其の儘其處に倒れ伏すのであらうが氣丈の彌一兵衞、

「何をッ、無禮者ッ」

と云ひさま、傍の脇差拔く手も見せず、切られながらに、横に振り薙つた小太刀の冴えは、スバーリ喜平次が右の腕を打ち落し、返す刀に褪のあたり、是また薄創ながらも斬りつけたが、何を云ふにも始めの痛手に堪り得ず、其の場にガバと打ち臥した。此の物音に驚き飛び込んで來つた父の彌兵衞、見れば四邊は一面の唐紅、我子の彌一兵衞は、可哀や肩口から滾々として迸り出づる血汐を浴

びて無言の最後、思はず茫然として佇む折から右の腕をば切り落されて、十方に暮れた喜平次、逸早くも中庭へ飛び下つて逃げんとしたる有樣に、怒氣心頭を發した彌兵衞金丸。

「己れ狼藉者めッ」

云ふより早く、續いて庭へ飛んで降り、苦もなく喜平次をば取つて押へて、三刀まで止めを刺し、其の場を去らせず成敗して呉れたが、我子彌一兵衞の玉の緒は、歸すに由なく可惜ら花の十五歳を一期として、あへなくも戀の妬刀に命を縮めて了つた。

燒野の雉子、夜の鶴、何れか子を思はぬ親はないが、たつた一人の男の子をば、それも人並み勝れた器量者の彌一兵衞を、空しく人手にかけて失うた彌兵衞金丸は、暫くが間は茫として氣の拔けたやう、何物も手につかず、欝々として月日を過す中、ゆくりなくも高田の馬場に於て、一場の慘憺たる果合は、此の彌兵衞金

丸に、安兵衛武庸なる豪傑を、其の花婿として引き合はせたのであつた。此所に於て、中山安兵衛をば、自家の養嗣子となし君侯の許しを得て、其の役を是に讓り、自分は江戸御留守居役の職にあつて、主君内匠頭長矩の御用を務めて居た。

然るに元祿の十四年三月十四日の騷動、お家非常の大變となつて、一藩は離散するの運命に立ち到つた。そこで彌兵衛金丸は、養子安兵衛武庸と共に義黨の一味に加はつて、千辛萬苦、具さに其の苦みを嘗めて、翌年の十五年十二月十四日、いよ〳〵時節到來、讐吉良家へ復讐のため討入するの段となつた。是より先、討入の時日が確定するや、意氣衝天の慨ある彌兵衛老人は、

「我等今は年こそ老いたれ、其の場に臨んでは、何條、若者共に後を取るべき」

とばかり勇み立つたが、十三日の夜來より降り始めた大雪に、たゞさへ氣の短かい老人の、愈々氣を焦ち、

「此の分では、明晩の討入りは容易であるまい、はて、如何したら宜からんか

しら、開を破つて這入るか、屋根を乘り越して押入るべきか」

など丶、獨り心を痛めつ丶、其の夜は其の儘枕に就いた、所が不思議なことには、夢の境を辿りつ丶あつた彌兵衛老人が、思はずも

雪霽れて心に適ふ朝哉

と云ふ一句を獲たので、早速雨戸を打開いて外面を窺つたところ、往き交ふ大路小路の巷こそ一面の銀世界にはなつたれ、曉の空は次第〳〵に晴れ渡つて、はては何時しか日の光さへ、射し添へ來つたので、

「扨は靈夢を蒙づたるか、あな有難し々々々、此の分ならば、今宵の勝算疑なし」

と、同志の士に斯々の次第と告げ知らせて、他處ながら其の勇氣を鼓舞した。

其の中に、日も暮れ果て來たので、今宵を名殘の酒宴ぞと、打ち集ふ一黨の諸士と共に、幾杯かの酒をあほりつけたので、流石の彌兵衛老人も、頻りと睡氣を催

した。そこで、

「まだ時刻も早し、且つは、討入の場所も程近いことではあるしする故、一寸、一休み致すほどに、時刻が迫つたなら、起して呉れい」

と云ひながら、肱を枕に大鼾かいて、今少し後には、命を的に斬り合ふのも知らず顔、グウ〳〵夢現の境に辿り入つたのであつた。既にして、早時刻も迫つたので、彌兵衛の甥佐藤城右衛門、堀部九十郎の兩人、

「最早、刻限も好いほどでおざれば、お目覺めなされては如何でおざるか、伯父上、伯父上」

と枕邊に寄つて呼び起した、と、彌兵衛、ムックと起き上がつて、用意の支度を整へ、豫て研ぎ上げ置いたる長槍を杖に、

「さらば行かうかのう」

と云ひさま、槍とり直して一扱、二扱、リユウ〳〵と扱き見てあるに、傍に居

つた娘の幸女、

「父上、今宵は室内の勝負と承りますれば短槍の方、かへつて御便利のやうに伺ひ置きましてござりまするが……」

と注意した、是を聞いた彌兵衛老人、

「オヽ、さうぢやつた〳〵、流石は拙者の娘だけある、よく言うて呉れた」

と喜びつゝも鉈とつて、鐔のところより柄を切り取ること數尺、リユウと扱いてトンと一突き、地面を突き鳴し見て、

「鐔を篏めてくりやれ」

と、城右衛門に命じて削入れさせ、二度三度突き狃らしつゝ、

「ウム、これで結構々々〳〵」

と、快然たる笑ひを後に、降り積つた雪明りの中を威風颯々として一黨の後追うたのである。斯くて勇氣勃々、本所松坂町なる吉良邸へ乗込み、血氣の士に劣

らぬ働きをして、首尾よくも本懷成就をなし、一黨の諸士と共に高輪泉岳寺へ引き揚げた。此所に於て、上野介の首級を亡君内匠頭の墓前に供へ復讐の事を終つて後、一同の者は本堂の方へと退いたが後に彌兵衛只一人、其の場に殘り止まつて、ドッカとばかり地に伏しざま涙と共に生ける人に物言ふ如く、彌兵衛金丸、墓石に取りついて泣喞つたといふ。さるほどに一同の諸士、公議の沙汰に從つて一旦仙石伯耆守役宅へと引き揚げた上、細川、松平、毛利及び水野の四家へ人數を分つて御預けといふことになり、彌兵衛金丸は、大石内藏介、吉田忠左衛門等十六人の人々と同じく、細川越中守屋敷へ引取られた。此の間に於ける一黨の樣子如何と云ふに、皆綽々として元氣横溢、洒々落々たるものがあつたといふ。中にも堀部彌兵衛老人は、七十有餘の高齡ではあつたけれど、其の元氣おさ〳〵壯年の者に劣らず、殊に本望を首尾よく遂げた上のこと故、機嫌の好いこと此の上もなく、日々串戲を云つては人々の腹の皮を撚らして居つたといふ事である。

夜になると、此の老人時々夢中に「鋭ッ、鋭ッ」と箭聲を發して、傍の人々の夢を驚かすこと度々であつたとか。兎角する間に翌年二月四日、いよ〳〵切腹といふことに定つた時、彌兵衛老人が大石内藏介良雄に向ひ、

「如何に太夫、今日我々一同の者何れも切腹と事定つておざるが、それについて他の三家へ御預けに相成つたる人々の覺悟のほどは如何なものでおざらうか、拙者今となつて何も思ひ殘すことおざらぬが、唯それのみが心懸りでおざる」

「イヤ御老人、それは御心配には及ばぬことでおざるよ、一黨の中には、さる臆病者はなき筈故、何もお氣遣ひめさることはおざるまい、とは云へ、拙者の忰主税が覺悟の程こそ知りたきものでおざるが、御老人如何でおざらうか」

「イヤ〳〵それは大丈夫でおざる、他の人達のほどこそ心許なけれ、主税殿には決して然る懸念はおはさぬ、貴殿の前ではおざるが、主税殿の御切腹は反つて貴殿よりもお美事でおざらうと拙者存ずる」

と遠慮のない老人だから、自分の思つた通りに云つて了ふ、大石も然うあれば結構だがと、一黨の統領と最年長の彌兵衛老人とが死ぬ際までも義徒一同の身の上を思ふたとは、無理ならぬことである。斯くて互に是までの勞苦を犒ひつゝ、堀部彌兵衛金丸は米良市右衛門の介錯にて、七十七歳を今世の名殘り、美事老の皺腹搔ッ切つて相果た、其の法號は、

及毛知劍信士

一基の墓に刻まれて、泉岳寺境内の松籟閑雅な所、今猶弔ふ人の跡を絶たず。

間　喜兵衛光延
間　十次郎光興

間喜兵衛光延の父は、同苗左兵衛といつて近江の人、遠く其の地の名族蒲生氏から出でた由緒ある家柄であつたが、故あつて人を殺し、仇を避けて赤穂に來り

住んで居つた。時の藩侯内匠頭長直は、其の才能ある所を知つて、遂に家臣の列に加へられた。其の子の喜兵衛、又謹直の故を以て人に知られ、早くよりして内匠頭長矩に事へ、祿百石を給せられて馬廻り役を勤め居つた。彼は深沈寡默、安りに人と談笑するやうなことがなかつたから、卒然として彼に對する人は、其の無口、寧ろ木强漢然たるに呆れるほどであつた、しかし其の心といへば、實に毅然として犯すべからざるの慨ある、立派な武士であつたのである。さればこそ凶變以來、一黨の人々なら、彼の原惣右衛門、堀部彌兵衛等と同じく、老成を以て信頼せられ居つたのだ、當時彼れは六十路の坂を越えた老齡であつたにも拘らず、其の元氣は壯者を凌駕するの趣あつた所、堀部彌兵衛と好一對であつたといふ。

十五年の十月、彼は原、岡島、貝賀等の同志の士と共に京都を發し、同月十七日、江戸表に着府するや、直ちに杣莊喜齋と變稱して町醫を開業した、もとより

戴井竹庵先生たることは確かである。

其の子の十次郎光興、是亦忠奮義慨の若武者であつたから、父が今六旬に餘る老軀を提げて國難に死せんとするのを見ては、何條默して見過し得べき、忠義の血は彼にも漲つて居る、乃ち父に從つて死盟を誓ひ、始めより終りまで終始一貫よく其の去就を共にした、當時彼は未だ二十四歳の壯年であつたが、文武兩道に通じ居つた一個名譽の武士であつた。其の武としては、彼の有名な劍客堀内源太左衞門正春について劍を學び、文としては一代の名流細井廣澤と交を結んで居つたのでも知れる、所謂、有武備者、必有文事だ。

彼は父に先だつこと一箇月、其の年の九月七日といふに、千馬三郎兵衞等の人々と共に江戸へ下り、柚莊十次郎と稱して、專ら敵情偵察の任に當つて居た。時には柚莊伴七、或は町人の重助、など、名乘つたこともあつたといふことである。

一說によれば、彼は其の弟新六光風と一致して、吉良家の附近を萇行商に身をやつして其の動靜を窺つて居たともいふ、勿論當時に於ては、新六の勘當の許されて居たことはいふまでもない。

斯くていよ〳〵討入と事定つた夕、父の喜兵衞光延は、當時春秋積つて六十八歳の老齡であつたにも拘らず、矍灼として結束姿も凜々しく、短槍を手にして威風凜然壯者の陣頭に突き進んだ其の武者振は、堀部彌兵衞と共に將に一對の美事さであつたといふ、其の槍の柄には、

都鳥いざ言とはん武士の
　恥ある世とは知るや知らずや

の一首を書きつけたる短冊を結びつけあつたる雄心、既に敵膽を呑んで居るではないか。

さるほどに敵營深く突き進んだる一黨は此處彼處に劍の刃音物凄くも戰鬪を開

始するや、喜兵衛光延亦槍を引きしごいて、一敵を美ン事突き伏せた。

其の子の十次郎光興も、奮戰力闘、父に劣らぬ働きをして散々に敵を驅け惱ましたる果、當の仇たる上野介に初槍をつけた其の幸運さ。

敵の見當らぬに一黨失望落膽したる折から吉田忠左衛門の聲として、

「人々お出會ひめされ〳〵、此の裏に人聲がいたす」

といはれて眞先に馳せつけた十次郎、味方の一人に戸をば打破られて絶體絶命、中より斬つて出でたる敵の二人を、三村次郎左衛門早速に討つて果す其の隙に、リユー〳〵扱いた槍の穗先に總身の力を籠めて、光興が鋭ッとばかりに突き上げた最後の一敵こそ、此の日頃、家を忘れ身を忘れてまで、思ひに思つた上野介義央であつたことよ。

一黨は嘻し泣きに泣いた、泣いてそして其の首は十次郎に擧げさせた、間親子は一門の名譽、一家の譽と狂せんばかりに喜んだ。

其の快擧斷行の後、彼れ十次郎光興は、平生深交ある細井廣澤に、紀念として兜頭巾を贈つて、以て身後の遺品としたといふ。

既にして其の四家に御預となるや、父の喜兵衛は細川家に、子の十次郎は水野家にそれ〴〵相別れることゝなつた。

さるにしてもいつに變らぬは喜兵衛光延であつた、常に資性謹厚、一日細川家の堀内傳右衛門が御預となつた義徒一同を音なうと、

「御覽めされ、喜兵衛老人ほど律義な仁が世間におざらうか、毎時の時でも話もされず、人の後ろにばかり引屈んで彼の通りにして居られる」

と若い人々は遠慮がないから斯ういつて笑ひ興じた、すると傳右衛門が、

「如何にも左樣、其の律義が顯はれたりやこそ、此度の御一擧に、上野介殿御首級を十次郎殿が擧げられたのでおざらう、誠に武士の冥加に協はれた御事、是と申すも、平素御老人が御律義のいたす所、さぞ〳〵御滿足でおざりませう」

と稱揚した、處が喜兵衛老人、たゞ莞爾として一言も物言はず、叮嚀に一禮したばかりであつたといふ、何處までも深沈寡言の老人だ。其のいよ〳〵切腹といふ前日、同情ある細川家の某といふものが、死後の依頼もあらばと尋ねたに、彼は辭世一首、

草枕むすぶ假寢の夢さめて
常世に歸る春の曙

と記し認めて示したぎり、相も變らず無言のまゝに莞爾と微笑を浮べたのみだつたといふことだ。其の介錯人は粟屋平右衛門、法號は「及泉如劒信士」で行年六十九歳。

子の十次郎光興は、又青山武助の介錯にて二十有六の短い生涯を終へた、其の法號は「及澤藏劍信士」

父子合せて三人、喜兵衛、十次郎及び新六の父子兄弟三人が、倶に共に大義に

與つたといふのは、一黨中たゞ此の間一家あるのみである。

吉田忠左衛門兼亮

一黨の統領大石内藏介良雄に次いで、第二に指を屈せねばならぬのは、事實上の副統領吉田忠左衛門兼亮である、此の人の家は赤穂の世臣であつて、身分をいへば足輕頭兼郡奉行、食祿はと問へば二百石、實に番頭の列にも入らなかつたが、忠左衛門人となり、軀幹魁梧にして、彊敏人に絶し、武藝に達し兵法に通じ、兼て文學の嗜もあつた、其の言語の明晰にして、辭令に巧なることは、夙に一藩の稱讃する所であつた。

一説には、忠左衛門もと丹波の多紀郡笹山の城主、青山下野守に事へたともいつてある、で、其の赤穂に更め事へた理由は、當時下野守の家老に横山監物といふものがゐた。すると玆に彼の京都三條通りに住居する骨董家で、橋本屋嘉平と

いふ者がお出入であつて、折節は種々の骨董物を持つて來ては、下野守の目に入れる。或る時、此の嘉平が監物の處へやつて來て、

「さて旦那樣、暫らく御無沙汰をいたして居りましたが、當年は殿樣がお國年で居らつしやる、斯ういふ品が出ましたが、お上へ一つお周旋を願ひたいが如何でございませう、就きましては、お値段が是々でございます、之がお上へ納まりますると、失禮ながら旦那樣に是だけ差上げまするで、何分どうか一つお骨折を願ひます」

といふので、監物がそれを取上げて見ると、小栗宗丹が書いた掛物、それに茶器なんかで、なか〳〵の物らしい、それで値が安い、殊には是を首尾よく殿へ納めれば、自分の懷中へ金が這入る、と斯う思つたから根が宜くない監物、イヤどうも大喜びて、

「宜し〳〵、承知いたした、早速上へ申上げてやる、暫らく控えてゐるやう」

と、そこで嘉平を宿へ下げて置いて、直ぐに殿の御前へ出で、監物奴、金になるかならないかといふ所だから、辯に任せて申上げた。すると矢張り、監物の所へ不斷出入りをしては、まアお髯の塵を拂つて居る内山右内といふ者がある、之も側から共々に、

「誠に是は何うも結構な品、それに値段が大層安うおざりますれば、お求め置きなされては如何でおざりまする、又探すと申しても、餘り見當りません所の珍品で……」

とさも珍らしさうに持掛けるから、何にも知らぬ下野守、

「ア、、左樣か、然らば買置いて遣はせ」

といふことになつた。監物大きに喜んで、先づ之で一杯飲めると、酷い奴があつたもので……。

處へ御前に伺候したのが吉田忠左衛門、

「オ、、宜い折柄に忠左衛門罷り出でた、是を見い、只今監物右内の兩人が申したによつて、求め置く事にいたしたが、何んと此の小栗宗丹の一軸、又貞宗の一刀及び茶入、誠に結構な品ぢやがなア、それに値ではない、又探すと申しても餘り見當らん珍品ぢや」

殿様は何にも知らないから、監物や右内が言つた通りいつてゐる。

「拜見仕る」

忠左衛門前へ出て一々拜見をして居たが、眉を顰めてゐて賞めない、大抵の人ならば、斯ういふものを見ると、殊には殿の前だから、

「イヤ是は結構な燒でおざりまする」

とか

「珍らしい模様で……」

とか何とか賞めるのだが、忠左衛門好いとも惡いともいはない、殿も氣になる

から

「コレ〳〵忠左衛門、如何なものぢや宗丹の筆、又貞宗の一刀、格別の出來ぢやと思ふが……」

と賞めて貰はふと思ふから斯ういふと、此方は忠左衛門、

「ハヽッ、恐れながら忠左衛門、申上げまする、拙者考へでは、此の宗丹は實物とは存じません、是は確とお取調べになつた上お買上然るべく、萬々一贋物をお買上げになれば、却つて後の笑ひを招きまする基、殊に此の貞宗の一刀、是とても拙者拜見をいたしまする所では、チト、どうも眼の屆き兼ねまする所がおざりまする、宜しく是は本阿彌へお掛け遊ばし、御吟味の上お買上げ然るべく……」

「オ、、左様か、其の方は豫て鑑定巧者と承知いたし居るが、其の方の鑑定に合點いかんとあれば、早々吟味いたすであらう……、コレ〳〵監物、斯様な次

第故、宜く〳〵取調べるやう」

「ハ、ッ」

餘計な事を忠左衛門奴、喋舌つたなと思つたが仕方がない、そこで御前を退つて、橋本屋嘉平を呼んで、

「さて斯う〳〵いふ次第だが、是は何ういふものだ、實く貴様が確と受合ふか」

「へエ、一體何誰が左様な事を仰しやるので……」

「當家の吉田忠左衛門が申すのだ」

「へ、ー、吉田様が、成るほど剛い」

「何が剛い」

「何が剛いと仰しやつて、之を何うも怪しいといふのは、實以て恐れ入つた次第、是は眞物ではございません」

「ナニ眞物ではないと」

「マア貴所一ッ考へて御覽じろ、之が實物であつた日には、なか〳〵申上げた値打ぢやア買へるものぢやございません、併し是は中々よく出來て居ります贋物でございますものですから、まア私がお上へお買上げを願はふと思ひましたので、第一是が眞物であつた日には、其様に貴所方へ、お禮の上げられる譯がございません、イヤ實く吉田様は剛い……」

「イヤ此奴どうも怪からん奴だ、然らば其の方は我々へ斯様なものを周旋いたさせて、煮湯を呑ませんといふ考へだな、イヤ不埒な奴だ」

「そんなに怒つちやアいけません、貴所方だつて斯様ことをするのは一度や二度ぢやアございますまい、毎度のことなら……」

「汝れッ、我々を嘲弄いたすか」

「へ、なに嘲弄いたすなんて、其様次第ぢやアございませんがな、マアさういふ譯なら此の品は頂いて歸ります、へイ左様なら……」

酷い奴があつたもので、其の品々を持つて橋本屋は京都へ歸つてしまつた。後で下野守が是を聞いて、いや忠左衛門は天晴れなもの、不埒な奴は監物であると、或る時是を散々にたしなめられた、すると監物の奴め、自分の惡いことを棚に上げ、斯うなつたのも忠左衛門故だと、非常に是を憎み出して、折もあらば此の腹癒をしてやらんと狙つてゐる、其の折も折、召使ひの女と若黨の吉右衛門とが不義をした、不義はお家の禁制、重ねて置いて四つにすべきを、忠左衛門が情を以て兩人の命を助けて、逃がしやつたといふことが知れた、是は好い事が耳に入つたぞとばかり横山監物は、

「イヤどうも吉田は不埒な奴ぢや、御家中の若侍を集めて、軍學の指南をいたす身でありながら、若黨と女中が不義をしたのを助けて逃がした、どうも彼れではお家の掟が亂れる、忠左衛門といふ奴は不屆きな奴ぢや」

と、遇ふ人毎に噂さしたから、だん〳〵とそれが擴がる、それも一人や二人の

所でいふのでないから、忽ちの中に一藩中へ噂されるやうになつてしまつた。始めの中は、下野守も忠左衛門を信じて居るから、眞とは思はなかつたが、三度にして市をなすの通り、遂々忠左衛門、丹波の笹山を浪人することゝなつた。處が幸ひなことには、或る人の傳手を求めて、それから淺野家へ事へることになつたので、茲に忠左衛門兼亮、二百石を頂いて足輕頭兼郡奉行を勤むるの身となつたといふ、二説就れを眞とするかは茲にいふまでもなからう。斯くて元祿十四年三月、主家凶變に當つて國許へ第一番の注進萱野三平、續いて二番の注進と、次第に赤穗へ乘り込み來るに國表の騷動一方ならず、城代大石内藏介急に一藩の士を呼集して圖議する所あつた。既にして議は一變し、再變して遂に城明渡しと事極り大目附荒木十左衛門、榊原采女の兩人出張に及んで、播州龍野の城主脇坂淡路守は大手鷹取峠より四千餘人を率いて繰り込み、備中足守の城主木下肥後守は、是亦二千八百の同勢にて搦手より乘込むといふので、赤穗の城中城外は今

にも合戰始まらんず有樣。すると玆に讃岐の高松藩中で竹井金左衞門といふ剛の者があつた、間諜となつて赤穗城中に入り込み、日々姿をやつしては大勢の人足どもと一緒に立ち働いて、城の備、乃至其の人數などを探索しつつあつた。處が一日、足輕頭の吉田忠左衞門が、其の部下の一隊を率ゐて、巡見に來たので、

「ソレ御郡代がお出でなすつた、お役人樣がいらしつた」

といふと、人足一同が其の處へ頭を下げる、金左衞門も同じやうに頭を下げてゐる、と忽ち慧眼の忠左衞門、ジロリ一瞥を呉れたかと思ふと、

「ソレ、夫なる奴は胡論の奴ぢや、召捕れッ」

と部下に命じたので、心得たと組下の足輕どもがグル〳〵ッと其の周圍を取り卷いた。サア竹井金左衞門驚いた、武士として繩を掛けられるといふのは、此の上もない耻辱だから、慌たゞしく忠左衞門の前へバタ〳〵ッと走せ寄りざま、大地へピッタり兩手を支へ、

「暫く、暫く御待ち下され、手前ことは如何にも御疑の通り實は隣國より入り込みましたる間諜の一人でおざるが、御眼力のほど恐れ入つておざりまする、併しながら、既に斯く見顯されたる上は、拙者の運命も盡き果てゝおざる、願はくば此の上の御慈悲に、武士の情、繩目の辱をば御免下されて切腹いたすべき場所を、何處なりとも御借し下されば忝じけなう存ずる」

と、流石は竹井金左衞門、少しも惡びれた樣子なく申し出でた。忠左衞門は之を聞いて笑爾と打笑み、

「さては左樣でござつたか、イヤ天晴れな御一言、其許も拙者も、御同樣に主人の爲めにいたすこと、奉公に變つた處はおざらぬ、決して御心配御無用、拙者も主人のために斯く城中を見巡りいたす者でおざるが主人内匠頭、江戸表に於て御切腹に相成り、今日にては命を何人に受けるといふ事もおざらん、只受城使の御來臨をお待ち受けいたすのみ、萬事滯りなく御引渡し相濟む上は、腹

搔つ切つて相果つる所存でおざる、貴殿は又、主人の爲めに穩密として當城へお出でなさる、御辛勞の段お察し申すでおざる、是が我等一同、公議の軍勢を相手に一戰いたす心得でおざらば、決して當城内をお見せ申すこと罷りならんが、右樣の次第故、何も祕密を守るにも及び申すまい、寧ろ貴殿のお望を協へて進ぜるほどに、御遠慮なく手前の跡に御跟きなされ、御案内いたすでおざらう」

「ハヽッ、それは千萬忝じけなき次第、御芳志の段、何ともお禮の申しやうもおざらん」

と、金左衞門大きに喜び、安心をして立上れば、吉田忠左衞門先に立つて、此處は本丸、此處は二の丸と、一々指點して殘る隈なくスッかり見せた、で金左衞門が、

「誠に有難き仕合せ、就ては卒爾ながら貴殿の御姓名は何と仰せられまするか、

何卒御尊名のほど、承知いたしたくおざりまする」

と、彼は感謝の意を湛へて申し出でた。すると是を聞いた忠左衞門は頭を振り

「イヤ是はシタリ以ての外の事を仰せられる、拙者貴殿の御辛勞をお察し申せばこそ、御案内いたして城中をお見せ申しもいたしたなれど、何も拙者の姓名など、お尋ねには及ばぬ事、又遠からず切腹をいたす身の、姓名などは疾うに捨てしまつて名乘る名もおざらん、サヽ、長く城中にをられてはお手前のため、宜うおざるまい、既に御望も達せられた事でおざらうから、是にてお別れ申す」

と、自身其の人を城門まで送り來て別れを告げた。此の事後に至つて、吉田忠左衞門なることが相分つたので、彼が寛仁度量の大、廣く人の欽慕する所となつた。此の一事を以て見ても、其の人が一黨から隱然副統領として信頼せられたる斤量が知れるであらう。

さるほどに、城明渡しも無事相濟んだので一藩の士ことゞく一同に赤穂を立退くことになり、内藏介は山科へ來つて足を留めるといふことになつた。すると先に江戸へ下つた連中から、どうか一日も早く復讐の一事を決行したいから早々大夫内藏介に御下向あるやうと、若い人たちのことだから氣が早い、頻りと急き立てゝ來る、けれども内藏介は、まだ時期が早い、もう少しの所と思ふが、若い人たちの事ゆゑ、又何んな無謀な事をしないとも限らない、よつて此の若い人たちを制へて行くには、吉田忠左衛門に頼むより他ないといふので、

「誠に御苦勞ながら、尊公江戸表へ立ち越えられて、若い人達をお抑へ下さるまいかと、内藏介からの頼み、忠左衛門聞いて、

「委細承知仕つておざる、併しながら拙者熟々相考へるに、江戸表の同志が、さ程までに思ひ詰められてこれあるものを、唯一圖に取り鎮めんこと、なかなか以て容易のことではあるまじく、さらば其の以前に先づ當所同志を集められ

たる上、篤と協議を相纒められて、多數の意向はこれ此の通りにおざればと申し陳ずれば、江戸表の衆も納得いたさるゝでおざらうがと愚考しておざるが、如何なものでおざりませうや」

「成るほど、御道理なる御意見、さらば當方同盟の衆を會して、それを取極めるでおざらう」

と、乃ち山科の會議が開かれて、復讐の一擧は、大夫のお見込みに任せるといふ事になつたので、茲に吉田忠左衛門、内藏介の名代として關東急進一派の者を鎮撫せんと下向の途に就いた。

是より前のことである、赤穂侯の祖、内匠頭長直の時に、近藤三郎左衛門といふ藩士があつた、兵法を小幡勘兵衛景憲に學んで、其の蘊奥を極め、斯の道を以て赤穂侯に事へ、苅屋の城は實に此の人の繩張に成つたほどあつて、關西の士人にして兵法を修める者は、大半其の門下に集つた位であつた。然るに内匠頭長矩

の世となつて、其の子近藤源八家學を嗣いで門戸を張るに及び、忠左衛門も是について其の敎を受けて居た。處が主家の凶變、突如として起り、主人は切腹、お家は斷絶、一藩は離散するといふ運命に至るや、彼れ源八は父に肖つかぬ下劣の男で、大野九郎兵衛等と一緒になつて金儲けのみを心掛けた白痴者であつた。時に忠左衛門は年六十一、もう宜い加減に頑固親爺の名を受ける年頃である、で、其の年齡といひ、場合といひ、殊には源八が下劣さといひ、何うしたつて大概の人ならば、唾引ッ掛けて其の敎なんぞ受けるものではないが、思慮優れた忠左衛門のことゝて、

「自分には爲さうと思ふ所がある、源八の人物如何の如きは、暫く問ふ所ではない、たゞ斯の道を習得さへすれば宜いのだ」

といつて只一人、止まつて源八に就き、其の未だ習ひ終らぬ所を學んでしまひ、然る後始めて其の門を辭したといふ。是等に徵しても、忠左衛門が復讐の決意あ

つたことは明かである。而して又、忠左衛門が思慮卓越であつたことも知れる。

彼は又、なか〳〵の敬神家であつた、其の京都滯在中、恰も菅公の八百年祭に際會した。それで忠左衛門は一七日が間北野の天滿宮に日參し、至誠をこめて立願する所があつた、其の折社頭に捧げた歌に、「梅」及び「松」といふ題のもとに

かきくらし雪ふりつもる山里も
　垣ねの梅は春をわすれず

去年今年年を重ねてさく梅も
　わきて匂の深き春かな

百年の數を重ねて若緑
　猶老松の千代や經ぬらん

花咲かぬ里はあれどもあしびきの
　山には春の松ぞ色こき

其の文雅、想ふべきではないか、殊に其の關東下向の途次、行く〳〵到る處の山川を詠じては吟眸を留めた。

逢坂にて

九重の霞を分けて出る日の
　曇らぬ御代にあふ阪の關

小夜の中山にて

夜をこめて越行く旅の空なれや
　東雲ちかし小夜の中山

又

ながらへば命ともなき夢の世に
　越ゆるやなごりさ夜の中山

薩埵山を越ゆるとて

われだにも三保の松原富士の雪
　こゝろや空にかゝる白くも

清見關

天の原霞も晴れて清見潟
　月をとゞめよ波の關守

實に風流なものである、これをこそ英雄の胸中閑日月ありといふべしだ。

既にして三月五日江戸表到着、早速在府の同志達に此の由を通知し、越えて三日卽ち同月八日、急進派の領袖堀部父子及び奥田父子等に會合して、内藏介の意のある所を知らしめ、且つ一黨と共に進退して期の到るを待つやうにと、是等を鎭撫して遂に其の意に從はしめた。當時、忠左衛門が江戸表に來たといふ事が追〻知る者によつて知られるや否や、松平豐前守、酒井伊豆守等の諸侯から、厚祿を以つて召抱へたいと申しこんで來た、勿論忠左衛門の人となりを知つて、其の

用ふべきを豫期したからである。併し彼れ忠左衛門には、復讐の大望があるから、其様な事には目もくれない、二君に事へる心がないと申し切つては、其の都度謝絶してゐた。其の關東に下向するや當初、祖父の名をかりて篠崎太郎兵衛と變稱したが、後更に田口一眞と假名して、作州浪人の兵學者といふ觸込のもとに、新麹町六丁目、大野屋喜左衛門が裏店を借受けて、兵學師範の門戸を張つた。そこで大勢の同志の士が出入りをする、併し軍學の先生だといふ所から、多くの武士が出入りしても誰一人怪しむ者はない、所謂化けるに其の道を得たのである。

斯くして忠左衛門は、片ッ端から同志を各處に配置する、其の中に一戸を構へる人があれば、世帶道具を買調へて送つてやるとか、家賃がないから金を借して呉れとか、やれ米がない、味噌がないとか、何だとか彼んだとか言つて來るのを、一々其れに應じて始末をしてやる、まア體の宜い、世話やきの親爺になつたのである。其の他文書の往復といひ、東西の策應といひ、皆一身に引受けてやつてゐ

た。殊に其の敵に對する監視警戒には、最も注意線密心力を盡して居た。

其の中に上杉家では、何うも上野介を江戸に置いては危ないといふので、本國米澤へ近々の中に引移らせやうといふことになつた、サア大變、彼の白髮頭の狸爺奴に逃げられたら一大事、是は愈々監視を嚴重にしなくてはと、茲に乃ち同志の士を呼び集めて、是を二組に分ち、一つを晝組、一つを夜組として、晝は晝組に命じ、種々の姿に化けさせて敵を偵察させ、夜は自分自分に夜組を率ゐて、吉良家の邊りを見巡り歩き、未だ曾て一夜たりとも是を怠つたことはなかつたといふ。是は若しも、敵が人目を避けて夜陰に乘じ、上野介を連れて米澤にでも逃げられては大變だから、餘處ながら是を見張り、萬一斯かる事でも起つたら其の時はもう仕方がない、途に彼等を擁して討取つてしまはふと、扨こそ斯うした次第なのである、其の行届いたる仕方といつては、實に上杉家と吉良家とに往來する大路小路は無論の事、四辻から橋、自身番から里程距離等、仔細に是を調べ置い

た上、猶討ちかゝる手段をまでも具さに調べて、是を同志の人々に分ち置いたといふ、彼れは斯くの如く、其の心血を一黨の統率と快擧の進行とに傾注して、又他事なきがやうであつたが、彼とても身は木石でない以上、時には望郷の念を催すこともあつた、其の東の寓居にて秋に逢ひ、紅葉移ろひ、蘆散りて、雲井に名のる雁が音を三更の天に聞く時、懷郷の思ひを動かす、亦血あり情あるの人としては道理なことである、其の年の秋「古郷雁」といふ題にて、

思ひすてしゆふべなれども故郷の
たよりとや聞く初雁の聲

と詠じたのを見ても、流石に其の心事の程が想ひやられる。

既にして十月の下旬に至り、内藏介の下向となつたので、豫め其の隱家を準備して、其の人を鎌倉まで出迎へ、爾後一黨の密議は内藏介の假宅と、此の忠左衛門の寓居との二箇所に於てのみ開かれることゝなつた、かの有名なる起請文前書

の如き、實に彼の方寸から出たのである。斯くて江戸表にある同志の士も今は全く集つたので、更に其の人數をば四組に分ち、愈々熱心に吉良と上杉との警戒、及び當の仇たる上野介の所在樣子等を探らせたが、何がさて張りに張り詰めた忠義の面々ゆゑ、今こそあれ時到れりとばかり、或は下人に身を窶すもあれば、或は物賣り小商人に扮裝つて朝晝夜の別ちなく、巧に吉良上杉兩家の邊りを彷徨つて、夜を明かすこと幾日幾夜。さるほどに時は元祿十五年師走の十四日時節到來茲に愈々吉良家へ討入りと決定したる時、内藏介が忠左衛門に向つていふには、

「さて吉田氏、讐家の表門は大手として、斯く申す内藏介駈け向ふでおざれば貴殿は裏門を搦手としてお指圖を願ひたい」

すると忠左衛門は、

「イヤ大夫の仰せ、委細心得ておざるが、御子息主税殿もあること、何も老耄の忠左衛門が指揮いたすと申すも如何、之は主税殿を以てして頂きたい、及ば

ずながら十内殿共々、其の後見いたすでおざらうから」

といつて承引かぬ。そこで内藏介も仕方がないので、

「しからば不肖の忰主税を以て搦手の指揮いたさせるといたし、後見の儀は吉田小野寺兩氏にお願ひ申すでおざる」

茲で充分に手配を相定めて、各自それ〴〵其の處に引取つたが、扨其の夜、一黨は何れも定めの時刻卽ち丑の上刻より下刻にかけ、悉く其の參集所たる本庄林町の堀部安兵衞宅、及び同三ッ目横町の杉野十平次が宅と、なほ二ッ目相生町三丁目なる神崎與五郎、前原伊助の兩人で住居して居たる其の宅との三ヶ所へと集つた。茲で豫て準備の衣類を着して今は意氣天を衝くの思ひ、正々として讐家に驅け向ふたのである、忠左衞門此の夜の扮裝は、一黨の統領內藏介と押並んで天晴れ目覺ましき武者振凛々しく、軍麾とつて是を身邊につけ、一黨討入の宣言書たる「淺野內匠頭家來口上書」を懷中した、斯くて去來出發といふに臨んで忠左

衞門は和歌一首

君がため思ひぞ積る白雪を
散らすは今朝の嶺の松風

と、降りつもる雪よりも猶いやまさる我が胸裡の、思ひをいざや晴らす日の、茲に來りし喜びを詠み出でたも、所詮は覺悟を極めた身の、已に是を辭世としたのである。

既にして堅門一蹴、塀を乘り越え、太刀をかざして槍を引きしごくの討入となるや、裏門の方を固め居たる吉田忠左衞門、小野寺十內及び間喜兵衞等一隊の隙を窺つて、今し二人の敵がッと長屋の前に立ち現はれた、兎見るより早く十內秀和、

「御參なれ」

とばかり先に進んだ一人と渡り合へば、此方の忠左衞門兼亮、是も續く他の一

人に驅け向ひ、各々槍を捻つて戰ふこと一二合、

「オッ」

と喚いて突込む兩人が槍の至妙に、敵しかねたる對手の二人、遂に脆くも其の處に突き伏せられた。是を始めに忠左衛門、又々邸中巡警の際一人の敵と渡り合つて、美事是をも槍玉に上げた、其の働きといふものは、壯年の者といへども、猶後へに瞳着たらしむるものであつたといふ。斯くて一黨首尾よく本懷を達して昔日の怨を忘れ、隊伍堂々一絲亂さず泉岳寺にと引揚ぐるや、忠左衛門及び富森助右衛門の兩人は内藏介の命により途中から大目付仙石伯耆守久尚の邸へ赴いたもとより復讐の一擧たるや、事ならざれば火を吉良の一邸に放ち、猛火の裏に腹掻き切つて、其の儘先君の後を追ふべく、事なるの日は、公議に訴へ出で、謹んで御公裁を仰がうとの心であつたからである。それで忠左衛門及び助右衛門の兩人が選ばれて、其の役にあたつたのである、といふのは、赤穂の一藩中で、其の

言語明晰にして、四方に使ひして君命を辱かしめぬ者は、先輩で吉田、後輩で富森と稱せられた位、よつて扨こそ斯くは其の任に選まれたのである。

そこで兩人は卽刻一黨に引分れ、各々手槍を杖つきながら、愛宕下仙石邸へと赴き、滔々懸河の辯をふるふて事の次第を陳べた、其の趣意は如何にも明白である、陳述も亦瞭然である、加ふるに使者既に禮義を守つて是を疎にするが如き行爲は微塵もない。伯耆守は心中頗る感歎して、是を欵待する所なか〳〵深かつたといふ、兩士、一黨の使者となつて、先づ其の名譽を發揮したといふべきである。

其の仙石邸に於て、

「公儀に於かせられて御詮議中、其の方共はそれ〴〵四家に御預と相成るに付き神妙に御沙汰を待ち奉るやう」

と口達された後、吉良家への討入、一黨の働き、扨は讐家邸内の光景、引揚の道筋など節を追うて伯耆守が問出でられた際の如き、内藏介、忠左衛門は交る交

る應答したが、辯論實に流るゝが如く、流石に一黨の統領達であると、列座の官憲共に敬意を表されたといふ。何處までも忠左衛門は、一黨の副統領たるに耻ぢざるの人であつた、かと思ふと、彼は又なか〳〵の輕口もやると見えた、一黨が四家に御預になつてから、忠左衛門が内藏介等と細川家にゐた頃の事である、一日彼は細川侯の家臣として名の高い堀内傳右衛門に向ひ、

「甚だ可笑しなお願ひでおざれど、拙者はお見掛け通りの通體、殊に年寄りの死骸などは一入見苦しからうと存じますれば、拙者切腹の後は、幸ひ此處に持參仕つたる金子にて、白布をお買取の上、二重の大風呂敷にして四方に鉤をつけ、大坊主の死骸が見えぬやうにお包み下さるやう、御懇意にまかせ、今より御依頼いたし置きまする」

といひながら、呵々と大笑したといふことである。冗談の中にも、自ら死を見ること何とも思はぬ樣子が見えて、忠左衛門が心の中こそ想ひやられるではない

か。

斯くて翌年二月四日、一黨こと〳〵く切腹仰せつけられて、潔よく泉下の君に見ゆることゝなつた、忠左衛門時に年齒六旬を越ゆること三、雨森清太夫が介錯の下に、芳名遂に永遠となつたのである。其の法號は、

及仲光劍信士

泉岳寺境内に今猶其の昔を語りつゝある。

間瀬久太夫正明
間瀬孫九郎正辰

間瀬久太夫正明は、一黨中、内藏介が左右の腕と賴まれた領袖の一人、小野寺十内秀和の從弟であつて、同時に中村勘助正辰の叔父である、彼は内匠頭長矩に事へて、大目付を勤め、祿二百石を領して居た武士である。

凶變以來、彼は醫者といふ振込みで京都に移り住んで居たが、其の内藏介から主税の身を頼まれて江戸に下るに及び、同じく醫者といふ名義で居つた、そして三橋淨貞といふ假名のもとに、新麹町四丁目に假寓して、絶えず内藏介が東下の後も、其の機務に參與して居たのである。

彼の人となりは、大目付で居たといふのでも其の大半は想像せられる、何故といふに、當時の大目付といふのは、卽ち大監察のことで、其の役は一藩の畏敬する人物でなければ出來ない役であつたからである、しかし彼が多く裏面に立つて活動したゝめ、其の名が他の人々に比して割合に表れなかつたのである、所謂椽の下の力持ち的に終つたのだ、けれども其の裏面に於ける彼の活動といふものは當時六十の坂を越えた老人としては、實に目醒しいものであつたといふ。彼は内藏介が石町の假寓に來り住んでからも、原、吉田、小野寺等の人々と共に、盛んに帷幄の裡にあつて、一擧の謀計に肺肝を碎いて居たのであつた。

其の子孫九郎正辰は、當時まだ二十一歲の靑襟、部屋住の身にすぎなかつたが一門の若人、卽ち小野寺十内が一子幸右衞門といひ岡野金右衞門が忘れがたみ、同苗九十郎といひ、孰れもまだ二十幾つの人々が、奮つて義盟の列に入るを見ては流石に堪へられず、加ふるに父の久太夫が老軀を提げて、一擧に盡瘁するのを見ては、最早躊躇する所はない、自ら進んで其の紅血を神文に注ぎ、以て義盟の一人となつた。

以來、彼は父と共に、京都に出でゝ其の活動を助けて居たが、後ちそれに先達つて江戸表に下り、三橋小一郎と變稱して、晝夜をわかたず、讐家の動靜を知るに備へて居た。俗傳には、彼が一日芝居狂言を見に行つた際、不圖したことから見物の人々二三と爭ひ、遂にそれを殺害するに至つたので、父の久太夫が我から勘當の願ひを上げて、彼を放逐した。そこで彼は江戸小石川小日向水道町なる、母方の實家和田某といふ者の家に厄介になつて居るうち、彼の凶變が端なくも起つ

たので、今は身の勘當されたるをも打忘れ、内藏介がもとに飛んで行つて、同盟に加はらんことを申し出でた、内藏介も其の忠義に感じて、更ためて其の勘當を許した上、義盟につかしめたといふことがあるが、これは勿論坊間に流布した一の話に過ぎなからう。

それで久太夫、孫九郎の父子は、相共に快擧の當夜奮戰して、敵膽を甚く寒からしめ、以て首尾よく日頃の本懷を遂げた、後父の正明は細川邸に、子の正辰は水野家にそれ〴〵分ち預けられ、翌年の二月四日、父子時を同じうして泉下の人となつた、時に久太夫は六十三歳、孫九郎はまだ僅かに二十三歳の一青年にすぎなかつた。

其の正明が最後の日、細川家の近臣に向つて、

「まことに卑陋なお話しながら、此の頃少々腹下りをいたしたので、萬一御場所に於て疎忽でもいたしてはとそれのみ心掛りでおざりまする」

と、老人聊か恐縮の體で申出でた。すると近臣のものが、

「イヤそれは御念の入つたこと、決して御心配なされまするな、その旨委細承知いたしておざる」

といつたので老人大安心の體、快く生害して相果てたといふ、其の介錯人は本庄喜助といふ侍、法號を「及譽道劍信士」といふ。

孫九郎の介錯人は、小池權六といふ人、法號は「及太及劍信士」といふのである。

村松喜兵衛秀直

村松三太夫高直

村松喜兵衛秀直は、内匠頭長矩に事へて、二十石五人扶持を食し、其の齡六旬を越えて尚矍鑠壯者を凌ぐばかり、扶持方奉行に廣間番を兼ねたる剛毅の武士で

あつた。主家凶變の際彼は、江戸表にあつて、一圖に殿の跡を追はんものをと、深く殉死の覺悟を決したが、兎にも角にも一旦は先づ國表へ下り、衆の宜しきに從はんと、一日嫡子の三太夫高直を其の膝下に呼んで、

「自分、君に事へてより今に六十年、其の御恩たるや眞以て測られぬ、然るに今度の凶變によつて、殿は御憤りを殘され、泉下の鬼となられた、其の臣として斯く徒らに居ること、先君へ對して不忠の至りであらうと思ふ、幸ひお國には聞えた大石太夫も居らるゝことゆゑ、おめ〳〵事を此の儘に過すことはあるまいと考へる、よつて自分は是より赤穗へ赴き、太夫が心腹を聞き、併せて衆議の行く所をも知つて、此の身の進退を計らうと思ふ、就いては其方は、まだ年も若くはあるし、且つは部屋住の事ゆゑ當地に殘り留つて、老いたる母に事へ孝養を勵んで呉れよ」

と云ひ聞かせた。當時三太夫高直は、生年二十五歳の血氣の若者、いまだ部屋

住の身の上であるとはいへ、君を思ふの心に變りはない、

「其の儀につきましては、父上より仰せなくとも、實は申上たく存じて居りましたる所、此の上は片時も早く御旅立ちなされて然るべきでおざりませう、併し何を申しても御老體のこと、御一人にての道中は拙者に於ても甚だ心許なうおざりますれば、是非に御供をゆるされまするやう願ひ上げまする」

と色を正して願ひ出でた、けれども父の喜兵衛はいつかな是を許さず、

「其方が供して參つたればとて、何の益もない、太夫の心底にして、自分の思ふ所と相違せねば、必ずや再び當地に戻り來るであらうゆゑ一先づ此の度は思ひ止まれ、そして老母の介抱をこそ專一にいたすやう後を宜しく賴む」

とばかり言ひ棄てゝ、厳然立つて家を出で品川、川崎と東海道を慕地に上り去つた。斯くて神奈川まで來ると、後から、

「父上〳〵」

と呼びながら息せき切つて來つた伜の三太夫、見るより父の喜兵衛は聲を荒らげて、

「何しに參つた」

と一言の下に尤め立てた。三太夫は其の顏を怨めし氣に打守りながら、

「仰せに背くも如何と存じ、今朝ほどは一旦お別れ申しましたものゝ、後にて熟々と考へ見ますれば、此度のことはお國の大事、彼の地に殘つて母上に事へ奉るは私事でおざりまする、三太夫部屋住とは申せ、是までに相成つたも一つに主家の賜、弟の政右衛門を殘し置きますれば、母上の心配はおざりますまい、よつて御跡を慕ひ、是まで參つておざりまするほどに、何卒御供のほど御許し下されたうおざりまする」

と熱心面に表はしていふ其の言葉に、父の喜兵衛も今は是非なく、

「さまでに決心したならば、其の意に任せて共々行かふ」

と、一百有餘里の長程を遥々馳せ上つて四月の四日、無事内藏介が下に到着、爾後父子は會議のあるごとに出席して終に同盟に加はり、籠城、殉死、其の議決に毎時進退を倶にしたが、最後に城明渡し一藩離散となるや、父子は再び江戸表へ下ることゝなり、喜兵衛秀直は荻野入道隆圓と變稱して醫者を假裝し、子の三太夫高直は芝源助町にある磯貝十郎左衛門方に同居し、植松三太夫或は荻野十左衛門などゝ假名して、專ら讐家の動靜に心を止めて居た。

此の間に三太夫は、朋輩の三村次郎左衛門包常が出入する神田柳原河岸の刀研竹屋喜平次光延方へ、知己になつた。然るに時期は漸く切迫して其の年の十二月初め、三太夫は其の所持の一刀を研に掛けんものをと、次郎左衛門と同道、竹屋の老人を訪れた、次郎左衛門包常は、平素薪割渡世となつて此の家に出入りして居たが、此の日には流石に姿を改めて、襤褸半天の代りに越後紬か何か然るべき樣子をして行つたので、喜平次が店の、弟子達には誰であるかゞ分らなかつたも

のと見え、今案内を乞はれて、

「へー何誰さまでございます」

と不審顔、次郎左衞門の薪割次郎も可笑しくなつて、

「是は〳〵お店の初どん、お久し振でおざるの、手前は此の間中、日々お伺ひいたした薪割の次郎でおざる」

驚いたのは仕事部屋に居た弟子たちだ、

「親方大變〳〵だ、薪割の次郎公が黑絲縅の南蠻鐵鎧を着こんで、竹屋喜平次に見參〳〵てんで」

煙草をのんで、毎日〳〵やつて來ては威勢のいゝ掛聲で薪を割つて行つた薪割次郎が來ないので、何うしたことかと思つて考へて居た竹屋の老人、

「ナ、何をいふんだい、騷々しい、叱驚したぢやアねへか、途方もない奴だ、……ヤこれは〳〵次郎どんイヤサ次郎殿、お久し振りでございます、實は何時

ぞやお出でなすつたぎり、お見えになりませんので、實は何うしたことやらと御案じ申して居りました所、矢ッ張り私の推量が外れませんで、到頭お武家の化の皮を表はしましたな、マ兎も角もお上りなすつて、サ、何うぞ……植松樣も何うぞお上りなすつて下さいまし」

「しからば御免蒙むる」

と一間に通つた兩人、

「實は喜平次どの、浪々中は永らくお世話に相成つたが、お目がね通り拙者こと、實くは奥州二本松の藩中で、小松次郎左衞門と申すもの、聊か理由あつて主家を浪人いたし居つたが、此の度再び歸參が叶ひ申して、近々の中に國許まで引込む都合でおざるゆゑ、今日改めてお禮に參上いたしておざる」

「左樣でございまするか、奥州二本松の御藩中で……左樣でございますか、毎度どうも失禮ばかりいたし、薪次郎など、呼捨にいたし、大きに申譯のない次

第、何うか御勘辨をなすつて下さいまし」

「さて御老人、此所に一つのお願ひがある、他でもないが、此の植松どのが一腰、念入りに研いで貰ひたいといふことでおざるが御都合如何でおざらうか」

「なるほど植松様のを、宜しうございます、少し仕事がたてこんでは居りまするが、他々ならぬ植松様のお腰の物、隨分念入りにいたしませうです」

といふので、次郎左衞門、三太夫の兩人、喜平次に呉れ〴〵も頼み置いて其の日は其の儘立ち別れた、

既にして十二月十二日に至り、次郎左衞門は三太夫もろとも再び訪れた、口さがなき弟子の誰彼は直ぐと是を喜平次老人に告げながら、

「親方、薪次郎さんが……」

とつい減らず口、

「何だ此の野郎、巫山戯たことをいふな、二本松の小松次郎左衞門様だ、馬鹿

野郎め口が曲るぞ」

と叱り置いて竹屋の主人、三太夫、次郎左衞門の兩人を奥へ招じ入れた。すると次郎左衞門は口を開いて、

「先日お頼みいたし置いたるものゝ研は出來たでおざらうかな、實は拙者も愈々出立が近づいたのでな……」

「成るほど、それは〳〵何うもお名殘り惜しいことで……御依頼の品は、是れ此の通り、チャンと研上げておざりまする」

「それは頂上、一つ拜見いたさう」

と、其の一刀を引拔き見れば、夏尚寒き氷の刃、水も滴れん其の様に、

「ヤ美事〳〵、植松氏御覽めされ」

と、同志の士の間柄とて他人行儀はない、我がものゝやうに手から手に渡せば無口の村松三太夫も思はず此刀を眺め入つて、

「ウ・…どうも美事〳〵、斬れるでおざらうな」

と何か斬りもしたい其の氣色に、

「斬れることは請合、刀が刀で研人が憚ながら此の親父、失禮ながらまだ貴郎様のお腕前は存じませぬが、大丈夫なもので、お疑もあらば一つやつて御覽なさい、彼處に並んで居る彼の肥つた野郎を斬心が宜うございませうから、一つお試しにやつて見なすつては如何で、大勢居りますから一人ぐらゐは構ひませぬて」

是を聞いた弟子は喜平次の開ッ放しに驚いた、

「親方、大變なことを仰しやいますな、肥つて居るからつてえ、冗談いつちやア困りますよ、研上げた度にやられて堪るものぢやアありません」

と愚痴るのも可笑しい、

「相變らず老人の座興、面白うおざるて、さて出立前のことゝて種々〳〵の物入で

充分の御禮も出來ず、甚だ赤面の至りながら、是にて御勘辨を願ひたい」

といつて次郎左衛門、一包の金子を差出した。喜平次はジロ〳〵と其の顏を眺めて居たが、

「左樣でございまするか、研料を下さるので」

「些少ながら何うか納めて貰ひたい」

「イヤ頂きませぬ、實の所を申せば、貴郎の御朋輩、失禮ながら植松樣のお刀ゆゑ、斯う速かに研上げましたので、お大名から金の山を積んでも、眼病をいひたてゝ容易にや仕事をしねえ此の親父、此のお金を戴いちやア私の名前に關ります、御別懇の間柄だから丹精をこめて研上げたやうな次第決して水臭いことをして下さるな」

「いや然ういふ譯ではないが聊か自祝の志しで……」

「如何いたしまして、斯樣なことをなされては却つて痛み入りまする、何うか

是はお納めなすつて」

と流石は柳原の竹屋で名を取つた喜平次、何うしても受取らない、そこで村松三太夫の植松が口を出して、

「左樣ならば當分暫くのお別れぢやに、江戸の名殘りとして一杯お振舞に頂りたい、それにて三人が淸くお別れ申さうではおざらぬか」

と言ひ出した。

「なるほど、それは結構、至極の名案ぢや」

と次郎左衞門も合槌を打つたので、

「さらば此の上の御辭退も失禮」

と、竹屋の親父も我を折つて、大いに酒肴を取寄せ、三人鼎座して且つ飲み且つ食ひつゝ、陶然として頓て別を告げ門口へと出る。すると三太夫が見る氣もなく上を見ると、新しい確固とした庇が竹屋の店に取りつけられてある、それに桑

の腕木が一本、美事についてゐるので、酒機嫌の上に今研立の一本を腰につけて居るのだから堪らない、ムラ〳〵と持前の氣が起つて、

「御主人、此の腕木を拙者に頂戴願ひたい」

と遠慮なしの三太夫、亂暴な所望をした。處が喜平次も變り者、

「宜うがす、しかし一昨日出來上つた許りで、今どうも取つて上るといふ譯には」

「イヤ取つて參るのではおざらぬ、此刀を一太刀試させて貰ひたいぢや」

「ナ、成る程、承知いたしました、宜しうございます、刀がそれで斬人が貴郎、研人が憚りながら此の喜平次、生金より堅い桑の腕木、何うかスッパリやつて下さいまし」

「イヤそれは有難い、然らば御免」

といふや否、スラリ一刀の鞘を拂つた業物、見て居た多くの弟子たちは、

「オイ〳〵彼の武士は氣が違つたぜ、彼の桑の腕木を切るといふぜ」
「馬鹿〳〵しいや、何ぼ好い刀だからつて生金より堅い桑の腕木、さう味く切れるものかい」
「ヤ、驚いたな、彼奴め薪次郎の二代目だぜ、薪でも割る氣になりやアがつて折角研上げた刀、ヘシ曲げてしまふだらうに、お目出てえ奴だなア、のつぺりして居やアがる」
「親方も親方だ、一昨日出來上つた庇、若し切られたら何うするんだい、此の暮の忙しいのに、又五六日も暇をつぶさにや元の通りになりやアしねえ」
「馬鹿いふない、彼の腕木が切れて堪るものか、手品遣ひじやあるめえし」
と、各自に思ひ〳〵のことをいひながら、ワイ〳〵覗いて見て居る。すると此方は、
「サアどうかスッパリお願ひ申します」

「然らば」
と一刀を取り直した三太夫、
「鋭」
と一聲、片手撲りに一揮り揮れば、斫りも斫つたり、生金より堅い桑の腕木、スバーリ物の美事に切拂つた、サア大變だ、庇がミシ〳〵いひ出した。
「さても此の切味の心地好さ、これさへあれば……」
と莞爾笑つて鞘に納めた面魂、此の處竹屋の親父も聊か面喰つたが利かぬ氣の喜平次光延、是も變つて居るから堪らない、
「イヤどうも御美事〳〵、斯うスッパリやつてお呉んなさると、私も大きに心持が宜い、まゝ有難うございました」
と喜んで居る、見て居た弟子は又驚いた、
「馬鹿〳〵しいや、一昨日出來上つた庇を打壞されて、頻に禮をいつていやア

がる、あれだから親方はモウ老耄たといふんだ」

「さうよ、此の間の普請中は何うだい、あんなに出入りに迷惑した癖に、又やらなきやアならねへ」

「本當に何うも仕樣がねへ、家を壞されて禮をいつてやりア世話がねへや、お目出度奴が揃つたものよ」

と呆れ返つて居る。三太夫も切りは切つたが、流石に後が氣になつたので、懷中から一包の金を取出し、

「老人、誠に濟まんことをいたした、しかし刀の斬味は充分、至極の頂上ぢや是は甚だ輕少だが、後をお繕ひ下されい」

と店先へ差置くなり、次郎左衞門と一緒に逃げるやうにして行つてしまつた。

「嗚呼いゝお武士だ、何うだいマア婆さん庇を直す代にして呉れといつて此の金を投りつけて行つてしまつた、オヽまだ見える、ウヽ彼所へ行つた、ア、結

構のお武家だ、よもや切れはすまいと思つて、おやんなさいといつたが、マア美事なものだ……ヤイ金次、棟梁の處へ行つて、庇が壞れたから來て下さいといつて來い、棟梁も驚くだらうな、マア大地震か火事さへなきやア、何年でも大丈夫だと自慢した庇が壞れたと聞いたら、肝を潰すだらう、仕方がねへ、當分の中は横の木戸を這入つて裏口から出入をしなけりやならねへ」

と、自分が商賣にする道具で壞されたのだから、結句是を喜んで居るやうな始末。

さるほどに其の月十五日、未だ明けやらぬ朝の靜けさを破つて聞ゆる復讐の快報は、人から人へ、紫電の如くに傳つて、只さへ氣の早い江戸ッ兒連中、よると觸ると此の噂さで持切りだ、

「昨夕は大變なことがあつたさうだな」

「大變て一體何だい」

「赤穂の家來が敵討をしたんださうだ」
「フーン、誰を討たんで」
「知れてらアな、本所の吉良樣よ」
「そりやアお目出度え、いつて見ねへか」
「ウム、ゆかふ、今引揚げて來るさうだから」
と、横丁の八も隣の熊もワイ〳〵見物に出掛ける。すると是を聞きこんだ竹屋の親父、
「何だ、赤穂の御浪人が主人の敵討をした、お目出度いこつた、さういふことがあるから研師の商賣が繁昌するんだ、婆さん羽織を出してくんな、野郎ども下駄を持つて來い」
「ヘエ、親方雨下駄ですかい」
「馬鹿野郎め、天氣の好いのに雨下駄が何うなる、早く日和下駄を持つて來い」

喜平次光延あはてくさつて狂人のやう、ドン〳〵柳原の堤を驅け出してやつて來たのが兩國橋向の袂、見ると黒山のやうな見物だ、
「オ、恐ろしい人出だ、江戸は物見高いといふのは知れきつて居るが、何てへ物好きだらう此の雪解に」
と自分も其の一人でありながら、
「チト御免なさい〳〵」
と人を押分けて前の方へ出しや張る。
「オ、爺さん、さう前の方へ出なさんなよ、食ふ物はないんだぜ」
「何を言ひ草るんだい、エ、年寄を勞はるのは若いものゝ役だ、第一に若いものは、また何時でも見られらア」
「巫山戯ちやいかねえ、こんな敵討が矢鱈にあるもんかい」
「愚圖いふなよ、去年の三月に淺野の殿樣が腹をお切んなすつたが、到頭其の

御家來が敵討をしなすつたか、さぞ御主人が冥途で喜んで居なさるだらう、お目出たいことだ」

「オヤ〳〵爺さんが泣いて居るぜ、泣くにやア及ばねへ爺さん」

とワイ〳〵人波を打つて居る中に、何時か兩側へズーッと並んでしまふ、其の中に、

「ソレ來た〳〵」

といふので、一同が伸上り〳〵見て居る所へ、四十七人の義徒一黨、列を正して進み來る、と其の中に見覺えのある三村次郎左衞門の小松次郎左衞門、それに植松の村松三太夫、兩人が勇氣凛々として濶歩し來たる樣子に、それと見た竹屋の老人、

「ア……ア……」

といつたぎり思はず其所へペチャンと座りこんでしまつた。

「だから云はねへこつちやアねへんだ、前へ出ると危ねい〳〵といつてるに……」

「オイ〳〵爺さん、何うしたい、腰が拔けたか、ナニ仙氣で腰がつッちまつた、大きに然うだらう此の雪解だもの」

とガヤ〳〵いつて居る聲が、三太夫次郎左衞門兩人の耳に入つたので、不圖振返つて見ると竹屋の喜平次だから、ツカ〳〵と其の傍へ寄つて來て、

「ヤ御老人、よう出て居つて來れたな」

「お立派なお姿で……御目出たう存じます、それにつけてもお二人さんとも、何で嘘ばつかり仰しやつたので、奥州二本松の家來だなどゝ、喜平次今にお恨みでございます、しかしお目出たう存じます、さぞ御本望で……」

「イヤ千萬有難い、實はな、ナニも嘘を申すといふ譯ではないのだが……ま兎に角失禮の段は許してくれい、拙者本名は三村次郎左衞門といふもの、猶語り

たいことあれど、先を急ぐによつて是でお別れちや」

「拙者は村松三太夫と申すもの、お蔭で刀が用に立ち人並の働きも出來た、有難く思ふぞ」

いふかと思ふと、二人共はや其處を離れて先へ行つてしまつた。竹屋の親父は何かいはふとしたが、口ばかりモグ〳〵やつて一向舌が動かず、唯ポロ〳〵ポロ〳〵と涙を滴して後見送つて居た。やがて立ち上つた彼は、何思つたか一黨の後を追うて、高輪の泉岳寺まで鼻を打ちかみ〳〵他處ながら其の見送りをして家へ歸つて來たが、歸ると直ぐ、

「誰か表に出してある看板を持つて來い」

と哦鳴り立つた。弟子は叱驚して、

「親方、今日はお天氣が宜いから表へ出したばかりで……」

といふと、

「愚圖〳〵いふな、其の看板を麁末にすると體が曲つてしまふぞ、勿體ない、早く外して來い」

といふので、早速下して持つて來ると、突然家中へ毛氈を敷いて、それを床の間へ恭しく飾り立つた、そして三太夫が切り込んだ桑の腕木を絹で鄭寧に卷いて置いて、

「サア野郎共、皆な仕事を止めて此處へ來い、ズーッと列んで此の品々を拜め」

と來たから弟子は愈々驚いて、

「是アいけねへ、親方は到頭いけねいせ」

「さうよ、キ印に違へねへ、あんまり人切庖丁を上手に研いだから、斬られた人の思ひが來たのだらう」

なんといつて居る。其の中に、燧箱を取寄せて、チャッ〳〵と火を打ち、

「サア皆な看板と腕木の前とへお辭儀をしろ」

と云つた。

「冗談ぢやァねへ親方、いくら薪次郎さんや、植松さんがやつたもんだからつて、拜まねいでも宜さ相なものだ、馬鹿〳〵しくつて話になりやしアしねい」

と弟子たちは愚痴たら〳〵。喜平次は靜かに拜みを上げて、

「此の間中家へ來た薪割の次郎兵衛といふ人、それから植松樣といふお方、此のお二人は是々斯樣〳〵の譯で、義士の仲間に入つて故主の仇を討つた三村次郎左衛門樣、村松三太夫樣と仰しやるお方だ、手前達譯もわからねへで、薪次郎だとかのつべりだとか云つたが、今に口が曲るぞ、サア此の看板と腕木に向つてお詫をしろ、皆な手をついてお詫を申せ」

と忠義の人心に感ずること深且つ大、竹屋は是を一家の名譽とした、事いつしか江戸四方に傳はつて、來り見るもの堵の如き有樣であつたが、惜しいかな、後に類燒の厄に罹つて、その看板と腕木を燒失してしまつたといふ。

事の眞僞はさて置き、喜兵衛秀直、一子三太夫高直の兩人は、一擧の當夜目醒しき働を示して敵膽を寒からしめ、翌十六年の二月、秀直は毛利家に於て江良清吉の介錯、高直は水野家に於て廣瀨半助の介錯にて、倶に共に冥府に赴いた、時に秀直六十二、高直は二十七歳の壯年であつた、法號は前者を及有林劍信士、後者を及清元劍信士といつて、今に一黨中名うての者と稱美せられて居る。

小野寺十内秀和
小野寺幸右衛門秀富

小野寺十内秀和は、祖父十太夫の時から赤穂藩に事へ居つた武士である。其の父又八の時、京都の留守居を勤め居たので、十内も其の後をついで、同じく留守居を勤めて、祿百五十石を食んで居た。

彼れ人となり資性溫厚、和歌を佐々木慶安に學んで頗る妙境に達し居たので、

爲に諷詠自ら娯しんで居た。彼は又、當時一代の鴻儒伊藤仁齋の門に遊んで、深く造詣する處あり、かた〳〵毅然たる氣節を保有し居つた。其の妻丹女は、灰方藤兵衛といふ同藩士の妹で、又風雅の心ある節探高き溫順なる婦人であつた、爲めに其の交情もなか〳〵に濃かなものであつて、夫唱ふれば婦和す的な、自ら梁伯鸞夫妻の趣があつたといふ。

其の平生詠つた中に

炭竈

山風に雪解の雲を吹きとぢて
　烟みぢかき小野の炭竈

時雨

定めなき空とも見えず槇の屋に
　かならず過ぐる夕時雨哉

老後述懷

おいぬればよそになされて古を
　語るそばにも聽人のなき

などゝいふのがある、以て其の一斑を知るに足りるであらう。

既にして江戸の凶變を聞くや、彼は妻子にも告げず所司代にも屆けず、厥然鎧一領に槍一筋、それに着替の帷子一枚を携へたぎりで赤穗城へと驅けつけた。其の京都を去るに當つて、下僚の一人某といふものが、

「貴殿は御留守居役の事ゆゑ、一應は所司代へお屆なされて、其の御許を得た上御出發あつては如何でおざる」

と注意した、十内是を聞くや莞爾として、

「出入の御屆けも時による、今は主もなき一浪人の此の身、何しにお屆けいたす必要がおざらう、屆けて暇をかゝしては、それこそ拙者一期の不覺、さる頗

累の愚は御差置き下されい」

と一言のもとに斥けたまゝ一散に赤穂をさして馳せ下つた、そして直ちに内藏介の邸に到り、

「我等小身にてはおざるが、百年の御恩を蒙つたるものでおざる、思召し立たせられた事もおざらば、是非に拙者をもお加へ下され、必ず生死ともに御指圖に從ふでおざらう」

と率先奮つて義盟に加り、其の謀議に與つた。當時彼は此の地から左の一書を其の妻女に寄せた。

六日七日の文各一どにとゞき申候、はゝさま何事なふ御座なされ候よし、うれしく存候、ずいぶん心をつけて、朝夕の食をうまきやうにししくんじ可被申候そもじいよ〳〵ぶじ、一だんのことに候、このもとのこと、きづかひのよし、尤に候、さぞ〳〵とおもひやり候、

九左衛門治右衛門一兩日中にのぼり可申つもりにて、それ次第そのやうすによりてのことゝみへ申候、われらはぞんじの通りに、御當家のはじめより、小身ながらいまゝで百年御恩にて、おの〳〵をやしなひ、身あたゝかに一生をくらし申候、今の内匠どのにかくべつの御なさけにはあづからず候へども、代々の御主人くるめて百年の報恩、また身ふせうにても小野寺氏のちやくそんにて候、かやうのときにうろつきては家のきづ、一門のつらよごしも、めんぼくなく候ゆへ、せつにいたらば、心よく死ぬべしと、たしかに思ひきわめ申候、老母をわすれ、妻子をおもはぬにてはなけれども武士のぎりに命をすつる道、せひに及ばぬ所とがつてんして、ふかくなげき給ふべからず、母ごさまいくほどのまも有まじく候、いかうにしても御いへじうを見とゞけて給はるべく候、年月のこゝろ入にて、ぢよさひあるべしとも、つゆさらおもはず、申に不及候へども、たのみ〳〵、わづかの金銀家財、これをありぎりにやういくしてまい

らせ、御命なほながく、たからつきたらば、共にうへ死可被申候、是も不及是非候。おいよ事望みの御方もありつれども、病ひよくなりての事よ、又は國のおやかたしうにきゝてのことよとおもひて、一日〳〵とのび〳〵にして、その事なくて、今此やうの時節になり候まゝ、今さら進じ可申とも申べきにあらず人の請取べきにもなければ、そもじとも〴〵にいかやうにもながらへ、まだ世のありさまをみ申さるべく候、さて〳〵おもひがけぬ世のありさま、むかしがたりにきく上也人形の太平記やうのものにて見聞しふせひ、いま此身になりて誠に風の前のともし火、はずへの露と爭ふ命となり、日ごろ萬に付て深かりし慾を忘れ、心のきよきこと水の如くにて、わざはひはかへりて出離の縁かと覺候

九左衞門治右入門かへりても、なか〳〵今の御代にて候まゝ、其ほどはかりがたく、かりそめのことにて、中々家中合點申まじく、十分に思ふ樣には參るま

じく候へば、とかく死ぬにて候、萬に一つもめんぼく有やうにも成候はゞ、生て再びあひ可申候、其元のすまいの事も、女の身としてなんぎのほどおもひやられ候ていたはしく候、こゝろざしある御かたがたへ身をまかせ可被申候

藤助に萬事たのむとことづて申候、此節文にて申に不及、何事も御さつし給ひ候へと申入候

松尾ごふしもさすが他家の人、ことに近國にて候まゝ、わざと控へて不申通に毎日々々に人給はりしより近頃恭ぞんじ候、其方を賴申こと、能々御申有べく候、此文のやうもみなこそ不申候へとも、御出候はゞよきほどに噂もめさるべく候、その内そのかたのこゝろ次第……總じて人に御申あるまじく候世上に顯はるゝ日は、おのづから人も聞事に候、其内にいふもいかゞにて候、まづ〳〵さたなり、

慶安どのへよく〳〵賴入申候、狀遣候時節にてもなく候ゆゑ、しんじ不申、

萬事たのみて差圖うけ可被申候、
御目付衆十六日に御越と申候、城うけとり十八日との沙汰にて候、のびちゞみ
もしれ不申候、
金十兩遣申候、お納戸長兵衛むすめ子むかひに參候にたのみ遣候、命つな
ぎの爲にて候、又々つかはし可申候、この方一もんも入不申候、申に不及候へ
ども、僅の金銀にても、だれ殿にも預申さる間敷候、手をはなさずもちて、是
限の露命つなぎにめさるべく候、かならず〳〵、
おせいもおなじ事に賴申候、かしく

四月十日　　十内

おたんどの

尙々幸右衛門はわれらとはちがひ、御おんもうけぬものに候まゝ、やうすもあ
るべき事歟、今からはしれ不申、何事も此元のなりゆきを聞屆けてのち、こと

ためさるべく候、その内しんびやうに御入心によく〳〵がつてんめさるべく候
こゝろのうちおもひやりて、せうしにて候、また〳〵文して可申候、
此の覺悟あつてこそ、内藏介が帷幄の密議に參與し得るのである、十内が心、よ
く表はれて居るではないか。

其の赤穗開城の後、彼も京都に來つて、佛光寺通東洞院西へ入る時に浪宅を
占めて、徐に時機の至るを待ちつゝあつた。

さるほどに此の年十月、討入の期も次第に近づいたので、彼は内藏介の郎黨瀨
尾孫左衛門を引き連れて、是が準備に京都を打立つた。其の途すがらも、文藻に
富める彼は、行く〳〵眼前の風光を國風に詠じては、其の感興を恣にした。

元祿十五年の冬都を立て吾妻に下るとて
おきわかれ今朝打渡る加茂川の
水のけむりは胸に立ちそふ

逢坂を越えて

立ちかへりまた逢坂と頼まねば
たぐへやせまし死出の山越

志賀の浦にて

故郷に斯くてや人の住みぬらん
ひとり寒けき志賀の浦松

都の空やう〳〵遠ざかれば
故郷の心あてなる大比叡の
山もかくるゝあとの白雲

同處にて時雨ふりけば

別れ行く思ひの雲の立ちそふや
今日もしぐるゝ東路の空

處々にてよむ歌の中に

より〳〵に都に歸る旅人の
數にもれなん身の行衛哉

忘れ得ぬ都の友の面影に
道行く人を比へてぞ見る

ともたちのもとへ

思ひ出は音羽の山の秋ごとの
色を別れし袖ぞとも見よ

東路より日の出る頃富士の裾野の通りて

波間より伊豆の海面さゆる日に
光をかはす雪の富士の根

箱根山を越ゆる時に相知れる人の吾妻より都に歸るに行きあひければ

妻の許へ文したゝめて其奥へ
限りありて歸らんと思ふ旅にだに
尚九重は戀ひしきものを

情緒纏綿、十内の心持は目に見るやうだ。斯くて十月十九日、江戸に入り、一先づ石町三丁目の大石主税の僑居に身を落付けた、そして名を仙北中庵と變へて醫者といふ振れ込み、それも時に都合が惡ければ、仙石又四郎ともいつて、晝夜のわかちなく一擧の計畫に肝膽を碎いた、其の共に事を謀るは大石、吉田、原などの人々である。

斯く多忙な中にあつても、所謂英雄の胸中閑日月ありて、時に筆を取つては思ひを三十一文字に表した。

江戸に到りて絶えぬれば舊き友の遺る者なければ
まくら刈るゆかりの草も枯果てゝ

霜におきふす武藏野の原

などは其の一例である。

既にして討入の場合となつた、彼は結束身を終るや、徐ろに墨斗の筆を取出して袖符の上にサラ〳〵と走らした一首の辭世、

わすれめや百にあまれる年をへて
事へし世々の君がなさけを

かくして讐家に突き進んだる彼れ十内秀和は、吉良の裏門あたり、長屋々々を固め居る折柄、つと隙を窺つて傍の長屋より二人の敵が躍り出でた、十内それと見るより早く、

「御座んなれや」

とばかり、手にせる鍵槍を取り直しざま、オツと叫んで其一人に突つ懸れば、敵は脆くも戰ふこと僅かに二三合にしてガツバと地上に打ち伏した、と見る北手

の裏口には、隣家なる土屋主税の邸で、自邸萬一の變に備へんとて、高張提灯を點し連ねながら、頻と犇めき合つて居る樣子、十内は是を見るより塀越しに聲を掛け、

「これは故淺野内匠頭の浪人共、亡主の欝憤を霽さんが爲めに、今宵當邸に推參いたせるもの、御鄰家へは決して毛頭も粗忽は仕りませぬ、何卒我々の衷情を御憐察下されまして、御見逃し是あるやう、只々御館のみを御守り下されたうおざりまする」

と會釋した世故の老練さ、暫く此處に留つて警戒し居るとも知らず、又々二人の敵が現はれた、十内早速に槍を捻つて其の一人を突き伏せる、折りしも其處を通りすぎた片岡源五右衞門、十内が手の内の美事さに、

「イヨウ、十内殿遊ばされた」

と思はず稱讃して行つた、十内も是を聞いて莞爾、尙も槍を繰り出し〳〵今一

人の敵をグッサリ突き貫けば、流石に、

「南無阿彌陀佛」

とあはれにも叫んで後へに撞と仆れ伏したといふ、蓋し此の夜の戰鬪に、最も多く敵を討取つたは、彼の据物斬の名人不破數右衞門それに次いでは實に此の十内秀和であつたといふことだ。

斯くて首尾よく復讐の快擧を遂げ終るや、彼は内藏介、忠左衞門等の人々と共に、細川越中守邸に引取られることになつた、其の間にも、彼の諷詠は時々筆によつて表はされた、そして最後に一片の長文を草して、以て其の妻女に永訣の意を告げた、是は今も猶、大高源吾忠雄が其の母御に贈つた一書と共に、一黨の遺墨中最も人々に嘆賞されつゝあるものである。

寺井迄ひそかにつうじをえて

一筆のこしおきり〳〵、古主のかたきをうちとり、本望をたつし、うれしさに

ことばなく候、そこもとへも、廿日廿一日頃に聞え可申と、おなじ心によろこびとすもじ申候、其後おひ〳〵にとり〴〵さたにてみなどもの事きゝおよび申され候はん、先達も正月はじめよりつき候はんと、風の便にきゝ候まゝ、これにてその方のあまたのうはさたしかにきゝて、うれしかるべくぞんじ候、

一、冬年十五日の夜、細川様へ参り、その夜にも御しおきにあふべしとおもひ候處におもひの外に、此まゝにてとしくれ、正月さへすぎて、ささらぎのけふまで、たゞ此の世の御酒をと、事ふしぎといふもおろかなりいかなれ、此うへのゆとりはあるまじきまゝ、けふの中にも事きはまるらんやと、いづれも御左右をまつまでにて候、誠に此たびの首尾、十ぶんにしあふせ候事、武連の至極にかなひ、八まんの御かごにてぞ有らんと、おもひ奉るほどの手ぎわなる、しわざどもにて、世上きせんともに、いにしひも日のもとにためしすくなきほどの忠義の事とほうびの由にて候、死しての思ひ出此うへ有まじく候、

一、越中守様も、その夜みなども、まだきてみもぬかぬうちに御出被成、ちかちかと御すわり被成、みなのものが、此度の忠義、ことにおちつきたるしかた、御かんじなされてと仰られ候、おもき大しゆ様の此ことば、まことにぶめうの本望とかたじけなく、大慶いたし候、扨御ちそう人、しゆご人、その外れきれきよるひる入かへ〳〵御もてなし、御料理小袖をはじめに、人の身にいるものは、ものゝ外は、けつこうに仰付られ、ありがたき御なさけにて、此世よりごくらくにいたりたると思ふばかりのくはッゆひにて候、幸右衛門、源吾、金右衛門参りたる御かた〳〵様も、越中様を御きゝあはせときこえ申候まゝ、それぞれに御もてなし　あひ可申とぞんじ候、

一、我等御しおきにあふてしするならば、かねてのかくごの事、おどろきたまふ事もあるまじく、とりみだしたまふまじきと、心やすく覺候、もう何事なき身となりて、都のかたはらにもすみ給はば、貞立様をよびむかへて、ともにうき

をかたりなぐさみて久しからぬ御いちごを見とどけまへらせらるべく候、たのみおく事これにて候、そもじたよりなき身となり給ふ事も、又覺悟の前なるべければ、これも思ひおく事もなく候、いか許おもひのこしても、かひもなきにて候、ともかふもして、一生をかすかにもおくるを、あきらめの心をばされ給ふまじ、

一、幸右衛門事、成程けなげにはたらき申候、金右衛門源吾もおなじ事にて候、大ていの事はきこへても、めん〳〵のかせぎはきこへまじく候、人の事を云およばぬ事おやこの事は、さぞきかまほしく思ひ給ふらめとすもじして申入らし、

十四日の日ぐれに、くら殿と二人、かごにのりて宿を出立、堀部彌兵衛かたへ行て九つ頃迄、ものくひ、酒のみて、かたりてそれよりはやし町と申所、堀部安兵衛のやどへゆき、こゝにてせひぞろひして、七つ過に打立て、かたきの

かたへおしかけ候、其間の道十二三町有所にて候、きのふふりたる雪の上に、あかつきの霜をき、いてこほりて、足もともよく、火のあかり世けんをはゞかりて、てうちんも、たいまつも、ともさねど有明に月さへて、道もまどふべくもなくて、かたきの屋敷のつじまでつめ、ここより東西へ廿三人づゝ二手にわかれて取かけ、東おもては、長やにはしごをかけて、屋ねよりのりこみ申候、おや子一方へはむかぬ事にて、我等は西へかゝり、幸右衛門は東へむかひ候、源吾幸右衛門その外二三人、かれ四五人、一どに屋ねを一ばんにのり、やねの上よりとびをりさまに、高ごゑに名のりて、すぐに玄關へかゝり、戸をけやぶり、おしこみ、番人三人ひろまにねてゐたるが、おきて立むかふ、一人を幸右衛門たかもゝをきりおとして、切ふせ、すぐにおくへ切入候、そのとこに弓たてならべてあるを、幸右衛門おくへ切入さまに弓のつるをはら〳〵とゞりはらひて、とおり申候よしにて候、これはかねてかたきの方に弓はやりて、いるも

のおほきときこへ候ゆへ、さだめて内そとともに、弓にてふせぎ可申候まゝ、その心得すべしと、おの〳〵内々いひあはせたるゆへに、かたきいづかたよりか、おき出て、うしろよりかいるべきと心得て、つるを切はなして、とおりたるならんと、よく心のつきたりとて、かるき事ながら、そのみぎり、人々かんじ申候、これほどのまをあはせ候事、おや心のうれしさ、そもじ共によろこび申され候、金右衞門は十もんじをよくつかふゆへ、手ごろ間をもちて、ひろまにて勝負して多勢をあひしらへとて、屋の内へきり入人數にてはなく、新門とて、小門のあるをまもらせおき候、あんごとく、こゝに出合ふ物を、つきふせ申候よし、源吾は大だちとて、なぎなたのやう成たちをもち、下にくれなゐの兩めんの小袖きて、上に兩めんのしろきひろそでの小袖をき申候、出立わきていさぎよく見え申候、これもとうのてきをうちとり申候、わかき者ども、ぶん〳〵のはたらきして、おなじく本意をとげ申候事、さて〳〵うれしさ、すも

じ有べく候、ともによろこび給ふべし、

さてわかき物、とし寄、あらそう事にあらず、わかき物をさしづして、老人はたゝまもりをよくすべし、かたきの家の内へおし入人數、一人もいきて出べからず、みなおなじこゝろざし也、たがひにあらそひもましおとりもなしと、打立まへに、たがひに神文じをかき申候ほどの事ゆへ、西の手は大石ちからをともなひかひぞへに忠左衞門我等參り申候、此手はかけやを以て、三村治郎左衞門三つ四つ戸びらをたゝきて打やぶり、どつと、おしこみ、すぐに上野殿いんきよのげんくわんへ、おし入申候、そのいきほひ、いかなるてんまはじゆんも、おもてをむかふべからずと思はれ候おし入て、門の右のかたの長や前にて、二人出あひたるおとこ、先へ出候を、我等二やりにてつきふせ申候、喜兵衞は門をまもり、我等は北のかた、うち口へ廻り、隣土屋ちから殿衆、垣ごしにやしきの内をまもりて居被申候、こなたより言葉をつかひその方をまもり、出あふ

もの、二所にて二人つきふせ申候、一人は片岡源吾右衛門見てゐて、十内殿あそばしたりとほめ申候、一人は大石瀬左衛門見てゐて、このおとこのたほれさまに念佛申たるまで聞申候、二人ながらせうこのあるにて候、老人のつみつくりとや申べき、やり身の事なれば、刀に手もかけ不申候、

一、親類書指上申せとて、此通かきて上申候、主人のかたき打て、死して、先祖の名を天下へあらはし、是又本望の一にて候、おやの御いはいのまへに、此書付をそなへ可被申候、

一、そもじぶじのよし、けふ吉田忠左衛門かたへ、去る方のつでにてきゝらし珍敷覺申候、人々のこゝろかはらず申てよきかたへは、よきほどに申さるべし、

一、日永く、するわざもなく、心のまゝにゐつおきつ、すきの晝酒もね酒もたべて、十七人のどうし、夜まで、こしかたをかたりちそう人衆もこゝろやすくあ

ひさつにてさびしくもなく、けふすでに五十日くらし申候、れいの歌よみてきかすれば人々袖しぼりかんじ入候、いかい事よみすて申候、何とぞゐるべくばあとで一筆又おくりて、歌もいひやるべく候、幸右衛門事も心やすく思ひ給ふべし、わがこの歌にてあきらめられよかし、

まよはじな子とゝもにゆく後の世は
心のやみも春の夜の月

死ぬべきなれば、古里もわすれたらんかとも、思ひもめさるべき、此歌此頃思ひつゞけ候まゝ申入候、せんぶにいろ〳〵のよみのやさいを出されたるを見て

むさし野の雪間も見えつふるさとの
いもがかきねの草ももゆらん

一、越中守様御大家にて、御人多ければ、歌人もありときこへて、慶安きゝつたへてくどくうわさたづね申されて、われら、そもじも、歌よむときゝしぞとて、

歌をたづね申され候人もあるにて候、歌の道の名までのうわさにあひて、はづかしくも、おかしくも覺候、

一、同名十兵衛、かね澤との家内、藤介、おろく、助くらをはじめて、心しだいなさるべく候、淺田瀨兵衛方、此正月より、つめにてのぼられ候ときゝをき申候、のぼりて御こしもあらば、かくすることもなきまゝ、よきほどにこゝろへて可申候、

一、どうしのさいしの事、いまゝでは何の御せんぎもなくて、御老中秋元但馬守樣の御内に、奥田孫太夫しうとゐ申候に、但馬樣より御さしづのよしにて、孫太夫さいしをしうとのかたへ引取申候、又田村右京樣とみのもり助右衛門女房のおぢゐ申候、これも御やしきへ引取申候、吉田忠左衛門さいしも、ちうしよ樣、むこの十郎太夫に引取と仰せられ候より、御いゐ〳〵かやうのいきほひにて、さいしまで、お大名がたの御こゝろにかけられ候事、おの〳〵本望かたじ

けながり申候、そもじは、ひきとるべき身よりもなし、あはれとや申すべし、えかうゐんどのへ御心得賴申候、いかほどかきても、つくすまじければ、これまでにて候、親子ともに腹切たりといふ左右、ほどなく聞へ可申候、何事も人かいつねなきをさとりたまふより外はあるまじく候〳〵、

二月三日　　十内

おたんどの

尙々玄溪かたへくわしく申入候まゝ、いわせてきゝ可被申候、以上、

讀み去り讀み來つて、誰れか涙のないものがあらう、言々一句、眞に血の文字たる此の一書は、確かに十内が眞情を吐露して餘りある。彼の介錯人は、横井儀右衛門といふ待、年六十一歳にて、此の名譽ある生涯をおくつたのである、法號は「及以串劒信士」

其の子幸右衛門秀富は近松勘六行重が舍弟であつたが、早くよりして叔父なる

十内の養子となつて居た、それで主家凶變の當時彼はまだ部屋住の身であつたので、十内は敢て是に義盟へ加はれとは命じなかつた、しかし彼も武士である、

「老父身を挺して國難に赴く、子として何條默して居られやうか」

と、自ら進んで其の一人となつたのである。十内が京都に移り住むや、彼も亦それに從つて京に入り、兄勘六と共々、常に急進派の列中にあつた。既にして其の年九月廿四日、大石主税等が關東に下向すると聞くや、彼も其の一行に加はつて、仙北又助といふ變名のもとに、江戸表は中村勘助の處に同居し居た。後父十内が下向するに及んで、其の方に移り住んだが、孝子の彼として、時に父の衣類など破れる場合、覺束ない手をして優しくも針を持つて繕ひやるなど、婦女子の業にまで從つて父に侍したといふ、忠臣は孝子の門より出づとは、眞に幸右衛門の如きを指していふのである。

それで討入當夜、彼は早くも一敵の高股に一太刀仰せざま、廣間に立て並べてあ

つた幾十張の弓弦をばら〳〵と斬り放した其の氣轉、時に取つての當意卽妙を、後々までも人々の稱美するところとなつた。是は當時吉良の館に弓矢の風が流行つて居たので、萬一にも一黨が奥へ入りこんだる後ろより、箭竦めに射竦められては一大事と、秀富が斯くは計つたのである。

其の生害した處は、毛利甲斐守の邸、介錯人は江良清吉、しかして行年僅に二十八、法號は「刄風颯劍信士」。

奥田孫太夫重盛
奥田貞右衛門行高

江戸表の三士と稱せられた其の一人奥田孫太夫重盛は、資性驍勇、忠實の心深い武士であつた。元來彼は淺野家譜代の臣ではない、内匠頭長矩の母たる先代采女正長友侯の内室、卽ち内藤和泉守忠勝の姉なる人が、采女正長友へ輿入にならー

れた際、其の御附人として供し來つたのである。然るに其の後内藤家は、仔細あつて永井信濃守尚長を意趣意恨あつて及傷せられた爲め、お家は斷絶改易となつた。それで孫太夫は其の儘留まつて淺野家に事へ、馬廻り役百五十石を賜つて武具奉行を勤めて居た。

彼は夙に、當時名うての劍客堀内源太左衞門正春の門に學んで居つたが爲め、彼の堀部安兵衞とは同僚同門の誼み深く、水魚莫逆の交りを訂した。

それで凶變以來、彼は殆んど寢食を忘れて一擧に盡瘁し、實に關東派一方の重鎭と仰がれてゐたほどあつて、關西の同派、原、潮田等と遙かに絶えず聲息を通じ、遂には忠憤のあまり一黨から分離斷行をまで策するに至つたくらゐであつた。で其の間といふものは、常に奥田兵左衞門と稱して往來し、同志の人々の續々と江戸表に入り來るのをば、吉田忠左衞門等と共々、其れを處理し、最も一擧に心身を傾注した一人であつた。

其の子貞右衞門行高も、父に劣らぬ忠義の若者であつた。彼れはもと近松勘六行重が舍弟であつたが、故あつて早くより孫太夫の養子になつて居たのである。

それで國難の勃發當時、彼は年いまだ二十四才の若輩ではあつたが、義に勇む其の氣性として、父や兄の義盟の列につくをば傍觀して居ること能はず、自ら奮つて其の盟約中に加はつたのである。

其の一藩離散するに及び、孫太夫、貞右衞門の父子は、鐵砲洲の家を退轉して深川八幡町に假住居をして居つたが、次第に一擧の時期近づくに及び、其處では何かと事に不便を感ずるといふので、更に深川は黑江町の舂米屋某といふものゝ借宅を借り受けて住居を移した。そこで傍ら父と自分との薪水の勞を取りながら、西村丹下と變稱して、身に聊か醫術の心得あるを幸ひ、町醫となつて漸くに其の日〳〵を送つて居た。もとより醫道の心得あるとはいへ、ホンの藥の調合ぐらゐしたか知らぬ貞右衞門の西村丹下ゆゑ、營業にしてゐる自分も多少ビク〳〵もの

で病人の脈を取つたであらうが、診察して貰ふ病人だつて眞實それと知つたならば、怖くして藥を飲むどころか、手を出すのさへも出來かねる、まつたく危ないお醫者樣であつたことは勿論である、所謂醫者は醫者でも藥箱もたぬ、藥御用なら袂にござる的の、藪も藪も大藪の竹庵先生だつたのだ。しかし斯うして四六時中家を外にして出歩く營業なので、親父の孫太夫や貞右衞門等が、同志の人々と會合するが爲め、家を留守にしても誰一人異しと見るものもない。そこで盛に是を幸ひ一擧のために活動して、日も是れ足らざるの働きぶりは彼の三宅觀瀾が「報讐錄」に、孫太夫を傳して、「衆の事を譽ぐる、重盛、武庸の巧謀頗る多し」といはれたのも當然のことである。

斯く父子して事に當り居る中、時期は漸くにして來つた、當時貞右衞門は新妻を貰つてまだ幾何も經たず、當才の男子清八を其の手に委して奮然快擧斷行の任に當つたのである、其の心根たるや、眞に思ひやるだに涙ではあるまいか、實に

恩愛の情も大義には易へられぬ、貞右衞門にして始めて行はれ得べきことである。

既にして父子は讐家に討入つた、孫太夫はさきにもいつた如く、堀内源太左衞門正春が門下にて、彼の堀部安兵衞武庸と相竝んで聞えた劍客の一人である。一尺七寸の樫の木欄に、鐵鍔を塡め、刀身實に二尺有餘の大太刀を眞向に振りかざし、喚き叫んで躍り入つた其の武者ぶり、當るを幸ひ、片端より斬り立て薙ぎ立て、立ち處に死人の山をも築く勢の猛烈さ加減といふものは、眞に鬼神も避けんばかりの有樣、これが今年五十五歲の老武者だとは受取り兼ねた働きであつた。

貞右衞門も亦、父に劣らぬ目醒しき活働をして、天晴れ若武者の名を揚げた。

さるほどに復讐の快擧も首尾よく終りを告げたので、奥田父子も一黨の人々諸共、一旦高輪なる泉岳寺に引上げて、公儀の沙汰を待ち、遂に孫太夫重盛は細川越中守邸へ、子の貞右衞門行高は水野監物邸へ御預と事定まり翌年二月の四日、美事切腹してのけた。

其の孫太夫が最後の一日前、細川家の家臣某が、死後の依頼及び辭世などあらばと懇ろに尋ねられたところ、天性眞摯な孫太夫、莞爾として微笑みながら、

「拙者此の年に相成るまで、切腹の稽古いたした事がおざらねば、誠に以ておぢ恥かしきことながら、如何やうにいたせば宜しきのでおざるか、一寸御指南に預かりたい」

と卒直な尋ね、家臣の某も亦老實なものであつたと見え、

「拙者も見たことはおざらぬが、聞くところによれば、小脇差をのせまいたる三方を自分の前に置かれた際、それをば引寄せられて肩衣を斯う御脱しなされて……」

などゝ注意する傍から、年若の富森助右衛門や磯貝十郎左衛門等が口々に、

「要らざるお稽古、たゞ首を突出して、承けてさへ居れば、御多分には漏れませぬ……」

とばかり、孫太夫ともく一度にドッと笑ひ出したといふ、何處までも死を見ること何とも思はぬ其の氣性、聞くだけでも氣持が宜いではないか。

彼の介錯をあづかつた人は、藤崎長左衛門といふ侍で、當時五十有七才の孫太夫從容として美事冥府に赴いたといふ、法號は「及察周劍信士」。

其の子の貞右衛門行高は、又水野家に於て其の家臣横山笹右衛門の介錯にて、父の後を追ふた、行年二十六、法號は「及湫跳劍信士」今尚父子して萬松山泉岳寺の土を飾つて居る。

原惣右衛門元辰

赤穂の義徒四十有七人の中、其の忠といひ義といひ、孰れが劣り何れが優るといふ者はないが、一黨の副頭領として、内藏介が左右の腕の一つと頼まれたのは原惣右衛門元辰である。彼は淺野侯に事へて三百石を食み、足輕頭を勤めて精勤

の譽れ高かつた武士である。茲に溯つて其の上を尋ぬるに、丹州氷上郡黒井村の杉の下なる所に、杉下平左衛門といふ者があつた、同所東町、原勘兵衛が一族である、この勘兵衛は、黒井村にもと城を構へ居つたる赤井惡右衛門を攻めし砌は云ふに及ばず、赤井落城の後も、此の東町を去らず居つた家筋の者である、其の一族なる平左衛門は、もと〳〵武術鍛錬の者なれば、仕官を望んで諸國を經廻つたけれど、思はしき事もなきまゝ空しく日を過す間、漸々にして播州姫路の城主松平大和守殿へ徒士格にて召出された。彼は末を樂しみに、精々忠勤を盡して天晴れ名譽の士たらんと期して居つたが、一日、一家中寄合ふて劍術の稽古が有た其の節平左衛門は素より要心流の達人なれば、一手見度しと賴み込んだ。人々もそれは最と易いことゝ早速承知をして呉れたので、平左衛門竹刀を取つて立合つたが、何れの人々も手に合ず叩伏せられて了つた。處が、其の中に徒目付小野治右衛門が弟の藤十郎といふ、田宮流の遣人が居つた。是が日頃腕前自慢の者であ

つたが、此の時平左衛門の爲めに散々に打据えられたので、一同の手前、大きに赤面をして其の場を退いたが、如何にも無念で〳〵堪へられない。そこで兄の治右衛門と申合せて、それからといふものは何かと奉公を間違はせ、平左衛門に恥辱を與へて苦しめた。然るにそれが高じ來つて遂に平左衛門に御暇が出たからサア平左衛門、無念で堪らない、是も何も皆、小野兄弟の仕業からと思ふと餘りの口惜しさに、城下の町端れに宿をとり機を窺ひ、遂に小野兄弟を引出して打放し、姫路を立退いて夫より所々方々を廻り廻つて大阪に出で、農吉野屋八兵衛といふ者が借宅に住居して、永の浪人に渡世すべきやうもなく、力あるを幸ひ、水汲みとなつて其の日〳〵を暮して居つた。然るに其の當時、淺野内匠頭長直が大坂藏屋敷に逗留して居て、日々姿を窶しては所々見物をして居られた。で、ある日のこと、見物の歸途農人橋を通つて我が宿へ立戻らんと、今し橋へ差懸つて來るとサツト吹いて來た風のため、頭に戴いて居つた陣笠がザブーリ川の中へ落ち

込んで了つた。御供の衆は是を見て大いに驚き、早速川端へ馳せ下りて來て見たけれども、折惡しくも滿潮の際とて水量多く、次第に川の彼方へと流れ行く樣子取ることも出來ず氣を揉んで居る其の折節、水を汲んで居た杉下平左衞門、かくと見るや早速川中へ飛込んで彼の笠を取上げ、叮嚀にも是を拭うて持來つたから御供の衆は大悅び、直樣手を出して笠を受け取らうとすると、笠を手にした平左衞門、それを渡さない。

「御手前方御主人の笠を取る事能はぬを氣の毒に思うたゆへ、掛構はぬ事ながら拙者取上げたのでおざる、直々に御主人へ御渡し申さうでおざらう」

と云ひながら、內匠頭の近くへツカ〳〵と進み寄り、彼の笠を差出した。御供の衆は、是を見て慮外者とは思つたが、差當る手柄といひ、且は內匠頭お忍びの事なればと是非なく控へて居る。內匠頭は差出された笠を取りながら、孰々平左衞門の面を見て何か心に肯づく所でもあつてか、思はず莞爾と微笑んで輕く一禮

せられた。そこで、途中のことなればとて唯單に名所を尋ねられ、追つて禮を申すであらうと其の場は其の儘立ち別れた。さて翌日になつて、藏屋敷から足輕使を以て農人橋へ尋ね來り、平左衞門を呼び出して、

「昨日は其の方の働きを以て、御笠を取り上げ呉れたる段、主人にも祝着に存ぜられ些少ながら其の禮にと、金子二百疋を下されたれば有難く頂戴いたすやう……」

と件の金子を差出した。見ると平左衞門は苦々しい顏をして、其の金子には手を觸れず、

「水汲みこそいたせ、金子が慾しうていたしたることではおざらぬ、お忍び姿とはいへ正しく歷々の御身の上と拜し、その着せられたる笠を水に流されたとあつては、外聞にも關り且は必定供の衆にも言譯あるまじと存じたればこそ、水中に飛入つて取上げ申したのでおざる、さるを水汲の拙者と侮り、鑑識違ひ

の進物、申し受くべき由來はおざらぬ、疾く〳〵持ち返りめされい」
と劍もほろゝの返答だから、使の足輕も驚いて立歸つた上、かくと申上げた。
此の時御供の役で内匠頭と共に藏屋敷に居つた奥野將監、足輕の言分によつて委細の旨を聞屆け斯くと言上に及んだ所、内匠頭は是を聞いて、
「彼が面體只者ならじと思つたが、果して器量のある者と見える、然らば彼を召抱へたき者であるが、將監如何いたしたら宜しからう」
とのお尋ね、奥野將監畏つて、
「聊か拙者にも存じ寄りましたる事のおざりますれば、萬事拙者奴に御委せ下されまするやう……」
と支度して直ちに農人橋へ行き、平左衛門と對面をなして其の由來を尋ねたに、彼も隱さず始終を物語つて、傍の古葛籠の中から一腰を取り出し、
「斯くの通りでおざる」

と鞘を拂へば明晃々〳〵、一點の曇りもなきに武士の嗜さこそと許り奥野將監大いに感服し、
「天晴れの御志でおざる、主人内匠頭も、昨日一見の際貴殿の斯くあるべき者と懇望せられ、拙者を以て仕官を勸めらるゝ次第でおざれば、少地なれども武功の名家、御奉公しめさるゝの思召はおざらぬか」
と云へば、平左衛門はハツと頭を下げ、
「こは有難き仰せ、拙者數年の間仕官を望んでおざつたが未だ思を遂げず、長〳〵の浪人の身、辭退に及ぶべき筈でおざれど、只今も物語りいたす通り、姫路の一件もおざれば赤穂に住居せんこと願ふてもなき次第でおざる、然れば御勸めに從ひ、隨分と御奉公いたすでおざれば、何分宜しく御取成し下さるやう」と、早速承知をしたので將監も共に打ち喜び、
「然らば明日迎へを遣すでおざらう」

と、茲に約を結んで其の日は立歸り、斯くと逐一内匠頭に言上した所、内匠頭も大きに喜ばれて、

「左樣であつたか、それは至極幸ひ、先づ百石にて馬廻申し付けん」

と翌日早々、供の者まで支度をいたさせ、馬を引かせ將監馬上にて農人橋へ立ち越え、

「いよ〳〵今日より淺野が家臣、供の用意をいたし參つておざる」

と挾箱を取寄せ、中より小袖上下を取出しながら、

「近頃侮りがましきことではおざるが、長々の御浪人、粗末ながら進上いたすでおざる」

と指出したから、平左衞門は、

「御深切の仰せ、誠に千萬辱けなくはおざれど、浪人の拙者、御屋敷へ參るまでは見苦しくとも更に厭ふ所おざらぬ、よつて御馴染なき貴殿の合力、受くべ

きやうはおざらぬ」

「イヤ〳〵杉下氏、是は卽ち主人の紋付にて、過日の御手柄により下し置かるゝ時服におざれば、是を着なされて御越しめされよ」

といふ將監の言葉に、平左衞門思はずハッと疊に平伏して、

「こは有難き仕合、拙者冥加の至極でおざる」

と押戴き、衣服を改めて嗜みの大小腰に、長屋中を暇乞に廻つたから、隣近所の家では驚いた、那の水汲みが斯樣にまで出世するとは、さて〳〵人と云ふものは分らぬ者よと、皆開いた口が塞がらぬほどに呆きれ果たと云ふ。それは兎に角、杉下平左衞門は此の旨家主に屆け置いて、奥野將監諸共馬上で乘り出したから四邊は黑山のやうな人高り、町内の者は總出になつて、今更に水汲み男の平左衞門を熟々と打眺め居る始末。やがて藏屋敷に行つて首尾よくお目見えも濟まし、程なく赤穂へ御供をなして原惣右衞門と改名し、諸事落度なく勤功を積んだが爲め、

内匠頭のお覺え目出たく遂に二百石に立身して側用人とまで相成つた。斯くて事なく日を送る中、此の惣右衛門に一人の男子出生に及んだ、名を惣八郎といひ生れついての器量人、人も譽めれば親の惣右衛門は猶更、掌中の玉と愛くしんで文武の道も及ぶだけ修めさせ、只管其の成長を樂しみにして居た。其の中に父の惣右衛門も寄る年波で、今は御役も勤め難くなつたので其の子惣八郎に家督させ、自分は隱居して餘生を送つて居た。そこで家督をした子の惣八郎、是も父に劣らず忠勤を勵んで、今は武頭とまで進んで三百石を食む身の上となつたので、茲に父の名を續いで原惣右衛門と名を改めた。此の二代目原惣右衛門こそ、義黨の一人となつて天晴れ千載の後までも名を輝したる惣右衛門元辰である。

斯くて淺野侯に事へ居つたる彼は、元祿の十四年中、君侯に隨つて江戸表に滯在をして居つたが、此の年四月、内匠頭長矩には勅使御饗應の役を仰せ付けられたにより、惣右衛門も亦この事に與つて、勅使饗應の館に詰め居つたる所、たま

〳〵十四日の凶變相起つて、主人内匠頭は卽日切腹、饗應の役は戸田能登守に改め代へられた。そこで龍の口なる傳奏屋敷を取片附けることゝなつたので、内匠頭に附き從つて居た惣右衛門元辰は、勅使接伴に用ゐたる器具萬端撤去の命を承はるや否や、何時何處にて用意し置いたからしといふ間に一種の船符したる舟を幾艘となく道三橋の下にもやひ、秩序正しく主家の道具一切をそれ〴〵に積込ませ、やがて鐵砲洲の邸を指して回漕させた其の手際、是が平時でゞもある事なら別に取立てゝ云ふ程のものはないが、當時の淺野家にあつては、主君の變事に何れも皆氣を轉倒させ居る所へ、斯く急な引き拂ひを命ぜられたのであるから、何う手を付けて宜いやら思ひ迷ふたのも無理ならぬとである。斯かる中にあつて、此の働きをなしたる原惣右衛門の技倆には、見るもの誰一人として感ぜざるはなく、

「流石は名取りの淺野家ほどあつて、此の期に臨んで斯くまで立派なる其の働

をいたすとは、嗚呼天晴れな家臣を持たれて淺野侯が、平生のほども思はれる、實に感嘆の至りぢや」

と、大いに是を譽め稱へられたといふ。

さても淺野内匠頭長矩には、此の程よりして吉良上野介が理不盡の過言を、堪へに堪へ、忍びに忍んで今日まで過し來つたが、思へば是も武門の意氣地、今は早一身一家を顧みるの暇なく、遂に殿中は松の廊下に於ての其の刄傷、無念やそれも水の泡となつて、其の場に居合せし梶川與三兵衛が留立に、双方共に御存命ながら、御家御大切の時節なれば、取敢へず急ぎ御注進申すと、江戸表片岡源五右衛門が計ひにより、速見藤左衛門、茅野三平の兩人を第一番の早打に立たせて城代家老大石内藏介に是を報じさせたが、其の日の黄昏時、主君内匠頭には、田村右京太夫へ御預の上、あはれや散り布く吹雪の下に、入相の鐘の音もろとも、果なくも冥府の道に旅立たれ、城地は召上げられて内匠頭の舍弟大學も亦閉門仰

せ付けられた。此所に於て、其の夜直ちに第二の早打に立つたのが、即ち原惣右衛門元辰と、大石瀬左衛門信清の兩人、江戸表より赤穂まで百五十五里の道程を十四日の夜に出發して十九日の卯の刻、即ち今の午前六時までに駈せ切つた、實に當時の旅としては早いもので、驛から驛まで宙を飛ぶが如くに駈けさせる、すると次の驛でも亦、駕籠を出して是を受取り、駕籠舁を促して又々次の驛へと駈けさせる、であるからして、是に乘り込む使ひの者も、餘程身體の壯健なものでなくば、決して務まるものではない、何にせよ幾日幾夜を仕つ切りなしに、駕籠に搖られ通しなのであるから、是に乘るものも豫め其の用意をいたして、頭には鉢卷をなし、腹には固く布を卷きつけて、駕籠の中に下げてある布紐に取り縋りつゝ、如何に搖られても搖り落されるやうな事のないやう、身體を支持して行く、それも十里か二十里なれば兎も角、百五十餘里の長程を、急げば急ぐほど駕籠の搖られることは甚だしい、それを十四日の夜中に出發してより四日半日の間、ま

んじりともせずして乘つ付け來つた赤穂城、況んや當時惣右衞門は年已に五十四並大抵の者ならば早五十の初老など、兎角は隱居仕度の引込み思案に暮れて居るを、忠義に凝つたる惣右衞門、お家に盡すは此の時ぞと許り、固より身を忘れ家を忘れて、生きる死ぬるも唯是れ君の爲めとのみ、一心凝つては何厭ふ所なく、四日半日百五十五里、搖られに搖られて猶平然たりしとは、是れや正しく忠の一念義の一心の餘慶ともいひつべきであらう。さても昨夜より今朝にかけての惣右衞門等が報告によつて、江戸表に於ける君侯の切腹、續いて主家の斷絶は、事細かに分明したので今は猶豫ならじと城代大石内藏介は、茲に奮然起つて卽日家中一統に總出仕を觸れ出し、諸士を城中に集めて此度の事變の顚末を告げ次ぎに今後に於ける一藩の方針を議した。議三日に亘つて猶決し兼ねた、此所に於て内藏介は、諸士の剛腹、忠不忠のほどを窺つた上いよ〳〵最後の大望を擧げんと決心し、乃ち其の三日目に於て始めて己が意見を發表した。然るに例の腰拔武士の大

野九郎兵衞等が、傍よりツベコベと妨げをのみ口走るので、堪へ兼ねたる惣右衞門、憤然座を進み出でゝ九郎兵衞が前にピタリと席を占め、

「先君の御爲め、御家の大事、下つては又我々臣子の分を盡さんといたす大石氏が御意見に、列座の面々概ね服しておざるものをば、其許等少數の方々のみ御異論あること眞以て合點參らず、但しは、武士の節義と申すを御存じなくて然るのでおざらうか今日の場合なか〳〵以て猶豫すべき議におざらぬ、其許はは や此の席におざることも御無用と存ずるにより、早々其の座をお立ちめされい」

と激せる顏色物凄く、一刀の鯉口寬げざま聲荒らかに言ひ放つた。是を見て流石の九郎兵衞大きに恐れをなし、今一言にても口答をせんか、惣右衞門が一刀は鞘を走つて眞向微塵、頭上に加はらんの有樣に、前の勢も何處へやら孤鼠々〳〵其の場を外して退城すれば、卑怯の者共一人立ち二人立ち、いづれも皆立ち去つて

殘るは卽ち選りに選り拔かれた金鐵の士のみとなつたので、さらばと許り內藏介始めて玆に心中を打ち明け、心を一にして亡君の鬱憤を霽らさん爲めに、怨敵吉良上野介を討たんの秘密は告げられた。そこで、いよ〳〵復讐の大事を決行することゝ定まつたから、一統何れも謹愼に謹愼をして、盡きぬ名殘の赤穗城をサラリと潔よく明け渡した後、統領內藏介は一旦山科の隱宅へと移轉つたが此の惣右衞門元辰は、當年七十五歲になる老母あるが爲め猶赤穗に止まつて、城下の町にある知人の方に一時居を移して居つた。然るに其の統領たる內藏介の許より折々の文通にて、種々の打合せなどいたし居る中に、一日出京を促がすの書面が到達した。玆に於て、思を中心に定めた惣右衞門、いざ打ち立たんといたしたが、心に懸るは老母が身の上、既に七十有五の高齡と云ひ、朝夕傍に附き隨うて孝養を勵みたきは山々なれど、固より大義には易え得られずと、匆々に旅の用意を相整へて老母に向ひ、それとなく言葉靜かに、

「御家御斷絕後の儀につきましては、是れまでも大石殿と每度の文通、其れ〴〵肝膽を碎き居りまするが、此の儀につき打合せ置きたき筋もおざりまして、暫らくの間京都へ上り申したく、先づ大約は十日か二十日の逗留と見込みますれど、又談合の次第によつては、江戶表へ罷り下りまするやも計られませぬが、若し左樣相成りました節は、自然歸國も手間どりませうと存じまするが、何も歸參の上御目に懸り申すべく、何卒それまで御障りなう居らせられ下さいまするやう……」

とさりげなく暇乞をした。此の惣右衞門が母といふのは、其の昔京極家に事へて居つた人であるが、緣あつて原家へ嫁した後も、夙に良妻賢母の名ある婦人であるから今忰惣右衞門の語をつく〴〵と聞き終つて、さて涼しくも信ひ放つた其の言葉に、

「さらば其方には是より旅路に赴かるゝか、段々の辛勞は、能う此の母も察し

やります、今更のやうながら、誠に越し方行末の事どもを宜く〳〵思ひ廻らすに、我家代々君侯の御厚恩により、先祖以來かく安泰に身命をつなぎまゐりし事、此の上の冥加これあるまじく、是を思ひ彼を考ふるにつけ、武士たるものは名をこそ惜しめ、此の度の旅行と申さるゝも、正しく御主君の御恩のほどを思ひ上げての事と存ぜらる、妾は女、殊には斯く年老いて、世間の事に迂けれども、此の度の事をいかでお察し申さゞらむ、さても〳〵世の中に、人の親の我が子を思ふ程切なるものはなけれど、武士の家に生れては、忠義の爲めに其の愛し子は愚、身をも家をも棄つること、これ平生の事にして、四民の中に別けて尊ばるゝも是故なれば、今徒らに其の愛に溺れ、苟且にも仁義の道を誤ら ば鳥獸と分つ處更にあるまじ、其方に對しては、斯樣の道理を語り聞かすの要はなけれど、此は唯母が心の中を明らさまに申すまで、然れば其方が此の旅をも喜びこそすれ歎きはせぬぞよ、よつて此の上は、何卒亡君の御憤りを休め

參らせ、せめて萬分一の御恩にても報じ奉らば、彼の世にござる父上にも如何ばかりか御喜び給ふことであらう、斯かる一大事の儀は、よしや年老いたればとて女の身、それと打ち明かされぬこそ世上の法にて、最も至極の事なれど、さりとて此の母は年こそ老いたれ心には片時たりとも亡君の御事を思ひ奉らぬことはありませぬ、其方が首尾よく本望を達して、討死したぞと聞くならば、何程嬉しくも喜ばしく思ふことであらうか、妾への孝行、何物かよく是に過ぐるもののありませうや、若しも此の母あるがために、心を是に引かされて、身命を惜しみ、萬ケ一にも主恩を忽せにする事にてもあらんには、重ねて再び妾に對面は無用でありますぞよ、其方も既に齡を積んで、物の道理を知らぬではなし、妾も又武士の娘として、武士の其方が母なれば、忠義の道を忘るゝやうの事もなくする事故、かへすぐも名を恥しめぬやう、折角勇氣を勵まして、本望を達せられるやう夫をのみ深く祈りまする」

と丈夫も及ばぬ其の言葉。

親子の愛も眞情も、主從の恩君臣の義を一念に大切と懸けて、諄々乎として說く所は、正しく內藏介を始め、同志の者の言ひ交したる彼の復讐の秘事と、符節を合したるが如きに斯くと聞いたる惣右衞門、ハッと許りにト胸の衝かるゝ思、さては早覺られたかと思ふと共に、我母ながら實にも其の心の凛々しさよと惣右衞門は衷心から感嘆して、今はなか〳〵に是を包み隱さんこと、却つて其の意にもどりもやせんと心の中に思ひ極め、

「實は親子兄弟たりとも、一切他言いたすまじき誓約の手前、何事も是までは御隱し申しておざつたなれど、母上ほどの御心懸け殊には唯今の御申聞を承はりまするにつけ、さばかり是をお包み申すは末代までの心殘りにもおざりますれば、仔細に御物語もいたすべし、有樣は御賢察の通り、何卒いたして怨敵吉良上野介を討つて、亡君の御無念を散じ奉らんと、既に同志の人々と義盟を

取り結び、此度もそれに赴き申さん爲めの門出におざりまするを、重々の御敎訓、惣右衞門膽に銘じて、やはか御違背仕るべき、それに就けてもありしに變り、定めし諸事御心に任せず、御起居のほども御心苦しく、御不自由勝ちにおはさんかと是をのみ心殘におざりまする……」

と、流石に今は止めかねたる涙の時雨。母は猶更氣も雄々しく、聲を勵まして

「大義には親も滅すと、何々ぞや其方が物語は今日の此の場の事にてあらう、母に就いては必ずともに、決して心に懸けて下さるな、それよりも猶、旅の用意を取り賄ひまた長の旅路とも成らんには、隨分ともに心をつけや、決して〳〵此の母に、心を惹かれるやうな事あつてはなりませぬぞよ、其の期に及び、萬一それに拘はつて、忠節を失はれるやうならば、母とは云はせぬ、子とは思はぬ、よつて能く〳〵事を計られよ」

と、子とし思へば今年茲に五十四歲の大丈夫、そを親なればこそ斯くも我が子

の上を安じて、情あふるゝ其の心添へ、惣右衞門は唯々感激して、暫く此の場を立ち兼ねたが、かくてはならじと心を勵まして、

「數々の御敎訓、誠に辱けなう存じまする、さらば是より御暇を……」

と云ひ殘し、翌日の朝まだきに山科さして赴いた。

山科に入つたる惣右衞門は、此所に內藏介と會合して種々に協議を遂げた末、未だ時機至らずとの下に、暫時の間一擧の決行を差し控ゆることゝなつたので、さらば此の間に今一度母御の顏を拜せんものをと、やがて播州赤穗へと立ち越えた。母は是を見て、いそ〳〵我が一室に招じ入れ、さて聲をひそめて、

「思立たれた密々の儀は、首尾よく成就して歸られたるか、怪我過ちも無き樣子、薄創一ッ負はれぬやうな……」

と、いと喜ばしげに問ひ出でらるゝに惣右衞門、

「其の儀は先達てもお聞入申したる通り、多くの義盟もこれありと申し、種々

の計畫も盡さねば相成らず、殊に未だ時至らずして發足の運びにも至らねば、其の間に今一度母上の御機嫌を伺ひ、且つは一家の處置をも仕りたくと、罷り歸りましたる次第におざりまする」

と答へて、尙なにくれと京の模樣より、さては江戸表の有樣を物語れば、母はたゞさり氣なく、

「さては左樣であつたるか……」

と、長の旅寢の勞をねぎらひつ、其の夜は快く臥床に入つたが、翌朝日闌けるまで母の起出で來らぬを訝り、蟲の知らすか何となく獨り心を迷はしつゝ、召使ひの女を呼んで日頃の樣など問ひ尋ぬるに、

「いつもは誠にお早くお目を醒まされまするに、今朝ばかりは如何遊ばされましたる事やらと、唯今もお案じ申して居りました」

との挨拶に、いよ〳〵胸を騷がしつ、

「左様ならば、お目覺めに相成らぬやう、お火など持參して靜かに御様子を伺つて參るやう」

と吩咐け、ソと臥床を伺はせた、

と、其の室にキャッと魂ぎる下女の聲、續いて其の座に仆るゝ物音に、這は只事ならずと惣右衞門、つと身を躍らして馳せ入り見れば無殘、母は端坐の姿一糸亂れず、一口の匕首に美事咽喉を貫いて、四邊は時ならぬ一面の唐紅。

「ヤ、、、這は母上には何として……」

と許り氣も動亂、血汐に染まる屍骸を我れと我が手に搔抱きつゝ、母上よ、母者人よと呼べと叫べど空蟬の、魂は何處をさ迷うか、唯異臭颯々として人の面を背けしむるのみ。兎みれば傍の机上に一通の遺書、取る手遲しと披いて打ち見る其の上には、筆の運びもサラ〳〵と、

過ぎし暇乞の折から、返す〴〵も母ありと思ふべからずと申し聞け候に、又立

ち歸り我をとひ候事、最も孝行に似たる不孝なり、ちかく老いたる母が世に存へてある故に、かゝる不覺を見るなれば、まづ自ら先へ死して、義を敎へ、武士の耻なからん事を示すなり、これも子を思ふの道なり、其方も年五十に餘りぬれば、中老なり、申すには及ばず候へども、町人百姓は義不義によらず、命を大切にして父母を育は是れ道なり、武士の家に生れては義と恩には一命を捨て酬ひ奉るこそ人にて候、とかく母に心ひかるゝの樣子なれば、老心のひがみにや斯く成り行き候まゝ、いよ〳〵心を固め、亡君の御爲めに命をすて給はるべく候かしく

日も六月六日と書して、母より、原惣右衞門どのへの名宛まで、さても美事の筆のあや、我が身を殺して我が子に大義を說く母の、よしや不孝の子たりともよしや忠たらざる人とても、是を見ては誰か心の底を奮ひ起さゞらぬ者あるまじきに、此の母にして此の子ある、是は忠と孝との元辰が、恩愛こめたる母の遺書に

腹も千切るゝ思ひ、百度千度己れを悔いて、キッと定めた心の固め。やがて葬儀を了へ、一家を片附け、家族を引き連れて、大坂に來り、天滿老松町の出外れなる曾根崎の邊りに一戸を借りて居を卜し、山科と赤穂の連絡を繫いで、關西一面の同志を統率した。

此の時に當つて江戸表には、堀部彌兵衞、同姓安兵衞、奥田孫太夫、同姓貞右衞門、赤植源藏、杉野十平次、村松喜兵衞、同姓三太夫、高田軍兵衞及び武林唯七等の面々が、頻りと復讐の一事に心を焦り身を悶えて、勃々たる勇氣制ふべくもなき中に、安兵衞武庸の如きは此の仇討の一儀を取り急いで書を内藏介に飛ばすこと多々。重々の催促で、若しこれを承引かで捨て置かんには、安兵衞等が猛進派の人々のみを以て、一擧を決行せんの樣子に事態やうやく騷がしくなり來つた。此所に於て九月の月に入るや、内藏介は惣右衞門を擧げて、是等鎭撫のため江戸表に向つて下らせた。そこで惣右衞門は、在江の諸士と傍ら血氣に逸る者共

を鎭めながら種々協議を重ねた結果、遂に堀部等が主張する翌年三月の復讐決行說に贊成して、十二月廿五日、大高源吾を打連れて江戸を出立し、途中共々に伊勢へ立ち寄り大廟に參拜をなして武運長久の祈願を籠め、かくて翌年一月九日に大坂表へ歸着した。是より先、惣右衞門は流石に内藏介が其の股肱と賴んだゞけあつて、能く内藏介が意中を悟り、彼が何卒して主家の繼嗣を存し置かんと、千々に心を碎いて居るといふ事も、具さに知つて居る。であるからして、彼惣右衞門自身も、内藏介と同じく共々に又主家再興に心を痛めて居つたのであるが、然ればとて其事は一つに幕府の意向にある事で何人が案じ暮したとて何の甲斐あるものではない、是は矢張り内藏介に托し置いて、自分等は何處までも復讐專門に取掛つた方が宜しと、豫て所存のほども定めてあつたので、堀部、奥田を始め、在江戸の諸士の意見にも心を寄せて、彼等が復讐の決行を三月にやりたいといふ申出に對しても、敢てこれを止めやうとしなかつたのである。さる程に、其の江

戸表を出發する以前に恰も吉良上野介が隱居の儀を願ひ出で　早速聞屆けられたのみか、跡式も亦滯りなく伜左兵衛へ仰せ付けられ、所領安堵といふ御達しまでも下し置かれたといふのを聞いて、在府の面々が心中は如何ばかり、其の中に唯一の頼みにして居つた内匠頭の舍弟大學殿の取立て延ひては御家再興の儀も水泡に歸したので、さらば是までなりと蹶起した一黨四十有七名の人々、いよ〳〵復讐の一事に專ら力を注いで時機を窺ふ、内藏介も關東へ下向する、といふ運びに立到つたから、惣右衛門も其の弟岡島八十右衛門並びに貝賀彌左衛門、間喜兵衛等と同道して、十月十七日、江戸表着其の名を和田元眞と改めて醫者といふ觸れこみ、又醫者で都合の惡い時には、前田善藏とも變名して、麴町六丁目の吉田忠左衛門が借宅に同居した。斯くて時やうやく熟して同じく十五年十二月十四日、寅の上刻を期して本所松坂町なる吉良が邸内に亂入する事となつた。此所に於て原惣右衛門元辰は一黨の首領大石内藏介と共に表門の方に廻つて、同志の

士二十二人の人々と其の門前に達するや、裏門に廻つたる一隊の諸士と合圖を共にして、ドッと許りに討入つた。此の時、表の大門は其の構造堅固にして容易に打碎き難きを察し、

「それ乘り踰せ」

といふ内藏介が下知の下に、用意の竹梯子を取つて投げ掛ければ、大高源吾イの一番、續いて小野寺幸右衛門、吉田澤右衛門等を始めとし、白雪つもる屋根の上へ、サラ〳〵サッと駈け登るに、我れ劣らじと若手の面々、梯子に取つき爭ひ上る、老功の人々も是を見て、續き續いて登り行く、中に是は惣右衛門元辰、早くも屋根裏に突つ立ち上つて、一黨を指揮しつゝ、猶しも邸内の有樣を彼方此方と打見やる、折から脛を埋むる雪の爲め、計らずも足踏み滑らして、大地に撞と落ち込んだ。此の際手足を數ヶ所擦剝いたが、幸ひにして差したることもなく、乘り込み〳〵遂に首尾よく上野介を討ち取ることを得た。後、此の討入當夜の顚末よ

り、無縁寺なる兩國回向院への立ち寄り、泉岳寺引き揚げの道筋、さては吉田、富森の兩士が、内藏介の代理として大目付仙石伯耆守役宅へ推參、當夜の次第を屆け出でたる事、泉岳寺にての復讐奉告祭等、細大洩らさず事細かに、一黨御預となつたる翌夜、細川越中守屋敷に於て惣右衞門が「覺」と題して書き記された。それは兎も角復讐の一擧に首尾よう成就したる一黨の諸士は、それ〳〵公議の沙汰に從つて四家へ御預となつた。惣右衞門は内藏介等と共に、細川家へ御預となつたので、此所に日を送る中其の年十五年も漸く盡きて、今日は立春と人々の云ふがまゝ、筆とりあげて、

思ひきや今朝立つ春に存へて
羊のあゆみなほ待たんとは

胸中閑日月ある惣右衞門元辰は、斯く認めて處刑の日を待つた。

茲に元祿十六年二月四日、いよ〳〵公議の沙汰は下つて、一黨の士に切腹仰せ

付けらるゝことゝなつたので、

かねてより君と母とに知らせんと
人よりいそぐ死出の山みち

と辭世の一首に名殘を止めた惣右衞門、增田貞右衞門が介錯のもとに、美事切腹して相果た、時に年五十六、法號を

及峰毛劍信士

と云つて、泉岳寺畔今尙香の煙りは絶えで、閼迦桶の水は常に淸らかにある。

吉田　澤右衞門兼貞
貝賀　彌左衞門友信

吉田澤右衞門兼貞は、同苗忠左衞門兼亮の一子である、凶變當時、尙部屋住の身であつたが、父が六旬の老軀を挺して、君家の難に死せんとするを見るや、勃

〳〵たる滿身の勇氣を持して、ともに〳〵死せんと決心し、早くより同盟の數に入つて、父の手助を何かと周旋して居た。

其の年十月、一擧の期近づくに及んで、父の後を追うて關東へ下向したが、途中に於て圖らずも下のやうな俗説を孕んだ。それは此の當時、大阪の歌舞伎役者で、袖崎三輪野といふ評判の女形があつた、是が澤右衞門と前後して江戸へ下り來つた所、名に負ふ有名な袖崎三輪野のことゆゑ、其の下向の一事がパッと道中へ知れ渡つた、然るに從來此の歌舞伎役者などが、街道筋へ來ると、雲助人足どもが、祝儀といつて盛に金を强請り取つて隨分と役者どもは難儀をする、それを三輪野が知つて居るので、旅武士の風をして道中をした、其の事いつしか雲助人足等が耳に入つたので、何でも顏の美しい旅武士が來たら、袖崎三輪野と思へといふので、宿場々々で頻りと鵜の目鷹の目、來たらば一番ウンと取つちめてやらんものと、手ぐすね引いて待ち構へ居つた。とは知るに由なき吉田澤右衞門、次

第〳〵に道中も過ごして、例の大井川までやつて來た、と待ち構へて居つた雲助ども、澤右衞門が美男なのにテッキリ三輪野と思ひ込み、

「これは袖崎の大夫、早いお上りでお目出度うございます、ついては誠に何だが……へつ酒代をウンと氣張つておくんなせえまし」

とばかり、グルリ其の廻りを取り卷いて强請り出した、澤右衞門は大きに驚いて、

「これはしたり、拙者は袖崎の太夫とやら申すものではない、それは人違ひであらう」

といつても容易に聞き入れない、何でもかんでも酒手を取らねばといふんで、

「何を吐しやアがる、汝ア大阪で當時隨一と名をとつた袖崎の太夫に違ひねへ愚圖〳〵いはねへで早く酒代の幾らかを出してしまへ、たかゞ役者の癖に大きな面アするねへ」

といつか喧嘩腰になつて來たので、澤右衞門も無禮な奴だとは思つたが大事の前の小事若一の事があつては兼貞一期の不覺と、若年ながら流石は忠左衞門の子である、辱を忍んで、幾らかの金子を與へて、其の場を早々に立ち去らんとしたところ、其の弱身につけこんで又もや無理難題、素直に酒代を出さなかつた代りに詫證文を書けといふ、重々の無禮に澤右衞門も今は耐へきれず、アハヤ斯うよとまで思つたが、茲ぞとばかり逸る氣をグッと押へて動かさず、請はるゝまゝに一札の證文を書き與へ、無念の思ひを忍び殺して、僅かに江戸へ向つて立ち去ることを得た、といふことがある。例の「神崎與五郎東下り」のそれに能く似た話であるが、現に其の詫證文が、藝州侯の屋敷にあつたといふ、何だか與五郎と馬喰ひの丑五郎を、澤右衞門のところへ持つて來たやうな話だ。

それは兎も角、父の後を追うて關東へ下向した澤右衞門兼貞は、田口左平太と變名して新麹町六丁目なる父忠左衞門が家に同居し、一意敵情の偵察に盡瘁して

居た。

其の復讐後は、毛利甲斐守家へ御預となり鵜飼惣右衞門の介錯にて、切腹し終つた、時に年二十九、法號を「及當掛劍信士」といふ。

其の伯父、貝賀彌左衞門友信は、澤右衞門が父忠左衞門の實弟で、夙に母方の養子となり、其の家を繼いで、金十兩、米二石、三人扶持を頂いて居た。そして內匠頭に事へて、中小姓兼藏奉行を勤めて居るうち、突として起つた主家の凶變彼の燃ゆるが如き忠義の心は躍つた。彼は兄忠左衞門と共に、最初から義を唱へて、同盟に列し、頗る內藏介の信任を得た。後關東下向するに當り、片岡源五右衞門が家に同居して、一擧に力を盡して居た。

其の最後は、松平隱岐守邸に於て、大島半平の介錯で行はれた、行年五十有四、法號は「及電石劍信士」。

千馬三郎兵衛光忠

知行百石、馬廻りを勤め居たる千馬三郎兵衛光忠は、永井日向守の家臣千馬求之助の子であつたが、早くよりして其の英物たることを人に知られ、遂に新知百石にて淺野家に召出されたのである。

彼は幼年の頃よりして文事にいそしんだゞけあつて、忠義の心淺からず、君の心にして不善と見れば、直諫して敢て遠慮する處なき所謂質直、阿諛諂ひを蛇蝎の如く忌み嫌ふといふ眞の武士的人物であつた。しかし氣の合はぬは如何ともすることが出來ぬ。内匠頭長矩は、何故か此の三郎兵衛光忠が其の意に適はず、兎角疎みがちであつた、光忠も是は自分の奉公の仕方が宜くないが爲めであらうと根が眞摯忠貞の彼れ、猶々心を苦しめて君に事へたけれども、亦如何ともすることが出來ず、獨り心に其の至らざるを嘆じて居る中に、あはれにも遂に永の暇を請ひ、身を退くの已むなきにいたつた。傳へいふ處によれば彼は家老の藤井、安

井の兩人から退身の内諭を受けたのであるともいはれてある。思ふに其の人となりから推察すれば、君侯の内匠頭と相容れずといふよりは、寧ろ是等の俗物どもと其の間が面白くなかつたといふのが、淺野家退身の原因であつたかも知れぬ。

當時彼は江戸表に在勤して居つたのであるが、此の内諭に接して心中大いに悲み、快々として一先赤穂へ退ぎ、密々一家を取りかたづけて既に此の處を立退ふとまで考へて居た處へ端なくも主家凶變の報知が達したので、

「義を見てせざるは勇ならず」

とばかり、直ちに以前の考へを打ち消して翻然内藏介の許へ驅けつけた。是が尋常一樣の輕薄な士であつたならば、是れ幸ひと早速後足で砂を掛け、主家の凶變も何もあつたものではない、いち足出して高見の見物でもするのが落だ、しかし流石は眞の武士、難に臨んで逃るゝが如き不忠不義の心は微塵もない三郎兵衛光忠は、

「君辱かしめらるゝ時は、臣死すとか、身不肖ながら亡君の御意にも適はでおざつたが、志しのほどは誰にも劣らうとは存じませぬ、堀の埋草とも思召されて、拙者が志しのある所を御立てさせ下さらば、武士の面目、何事か是に過ぐるものおざりませうや、今は籠城なり、殉死なり、太夫の御指圖に從つて、死生進退を倶に共にいたしたう存じまする」

と悲憤の涙片手に申し出でた。内藏介は是を聞いて、甚く光忠が忠志のほどを感嘆しつゝ、

「御邊がお志し内藏介身にしみておざる、當淺野家の藩中、たれか先君の御恩寵を蒙らずといふものおざらねど、御愛他に異つて恩祿身に餘れる者どもさへ、今凶變と聞いて多くは義を忘れ、逃支度をする最中一旦君の御不興を受けて其の御心に適はず御暇を賜つて身を引かんとまでに立到りながら、國難と聞いて踏留まり、一死よく日頃の鴻恩に報いられんとて、我等と死生進退を共にせら

れようとの御心でおざるか」

と泪を浮べて深くも喜び、即刻同志の一員に加へられたとは、三郎兵衛光忠が心のある所、實に欽仰すべきである。

俗傳によれば、彼はもと武州平間村の郷士遠く流れを千葉之介常胤に汲める由緒ある士であつたが、一年伊勢參宮の途すがら、槍持にとて召し連れ行つたる者の疎忽より、尾州名古屋の藩中、岡田某といふものを手にかけた爲め、すでに切腹せんとした時彼の原惣右衞門に知られて死を思ひ止まり、遂に其れが緣となつて淺野家に隨身したといはれてある、もとより取るに足らぬことはいふまでもない。

斯くて爾來、彼れは同志の士と共に一意專心、復讐の一事に心身を痛めつゝある間に、一の幸運に際會したといふのは、茲に彼が長らく交りを結んで居つた名譽ある浪人があつた。此の浪人は江戸の旗下どもと數多の懇意がある所より、頗

る吉良家の虚實を知つて居た。そこで三郎兵衛は奇貨措くべしとばかり、是を談らつて或る旗下の家に寄偶させ、日毎に讎家の動靜を窺はせ居つた、爲めに一擧の上に盡す所甚だ多かつたといふことである。既にして時機やうやく切迫し來るや、彼は原三助と變名して、着々偵察の歩を進め居るうち、時は元祿十五年十二月の十四日、期いたつて討入りし吉良の邸は、手練の槍先に敵を散々駈け惱ました る其の働き、實に見事なものであつたといふ。

其の最後は松平隱岐守邸に於て、波賀清太夫の介錯の下に、今年五十一の一生涯を終つた、彼れ法號は「刄道互劍信士」。

木村　岡右衛門貞行

陽明哲學の士、木村岡右衛門貞行は、赤穗藩三代相恩の家柄であつた。彼の祖父吉兵衛の時、始めて淺野の家臣の一人となつて以來、其の父惣兵衛を經て、岡

右衛門貞行に至つたのである。彼は祿百五十石を領して、馬廻に列せられ居つたが、幼けなくして早く學を好むの風は、遂に當時の學者小川某について、陽明學を修むるに立ち至つた。それで主家凶變の際、多くの人々は其の去就に惑ひつゝあつたにも拘らず、彼は泰然として其の從ふべきに從つたのである、こは是れ平生修むる處のものが與つて大いに力あつたはいふまでもない、斯かる人であつたから、其の性謹言方直、武士的といはんよりも、寧ろ學者肌の人であつた。

江戸に下つて以來、彼は本庄林町五丁目なる、堀部安兵衛武庸が住居に同居し、石田左膳、或は町人八兵衛などいふ變名のもとに、着々一擧の歩を運ばしむるに心力を傾注しつゝあつた。

さても其年十五年の十二月十四日、いよ〳〵討入といふに先立つて、彼れ岡右衛門貞行は、一篇の詩を賦して、兜頭巾の裡に收め入れて出發した、其の詩の初めには、一擧の止むべからざる所以のものを詳說してあつた、左に示すのがそれ

である。

「君子疾惡之心、小人驕横之行、二者卒然相激於談笑之間、必有相害而不相容者、宜哉先君之逢鄙夫而殞厥身也、惜有事殿中之日、不得快於一擊之間、而身獨嬰法網以亡、使鄙夫全首領於家、以貽臣等無窮之恨、臣等以此憤惋鬱怒、奮不顧身、必刺鄙夫、以報君仇、而尚忍詢抑志、以至踰年不發、非敢後也、時未至也、嗚呼吾大父吉兵衛始仕霜召君受公子采女君之遇、由是吾父總兵衛、事前内匠君、甚見親近、以至不肖某、繼事先君有年、雖不改私不次之寵、然因父祖之績、荷世祿之厚、以養妻子、畜婢僕、其沐君恩也亦已多矣、今也從同志義士相與蹈白刃、決必死、上有以報君主之恩、下無以辱人臣之義、豈非臣大幸歟、冀賴先君之靈、得義央父子首、獻之影堂、臣等所祈在是而已、不勝欣躍之至、綴野詩一篇、以述基志、

身寄浮雲滄海東　久愆恩義世塵中
看花對月無窮恨　散作曉天草木風

後年四十六才、介錯人は久松家の臣宮原久太夫、法號は「及通普劍信士」。

中村勘助正辰

中村勘助正辰は、白川の藩士三田村十郎太夫の子、故あつて中村家の養子となり、内匠頭長矩に事へて、百石を食し、馬廻兼右筆の御役を勤めて居た。

凶變當時、彼は赤穗に在つたので、當初より奮つて義盟の數に入り、籠城、殉死、復讐と議論再變三變するに及んで、其の決心はいよ〳〵堅く、牢固として動かすべからざるものがあつた。で、彼は寧ろ急進派に屬して居たので、關西では彼の原、潮田の諸士、關東にあつては例の堀部、奥田等の人々と相呼應して、盛んに快擧の速行を熱望して居たのである。

既にして其の年七月二十八日、京都圓山の大會議に於て、一擧斷行の議大いに決するや彼は其の家族を緣者のもとに擇せんとしたが、不幸にして近國に居るもの一人もない、尤も叔姪の間柄として、間瀨久太夫、及び同苗孫九郎の兩人があるけれども、是は一擧の數に入つて居るので、其の家族を擇すべきの人ではないと此の際奥州白川は松平大和守基忠の藩中に、彼が實父の姓名そのまゝをついだ甥の三田村十郎太夫といふのが唯一人あつたのみであつた。そこで賴むところは此の人ばかりなので、遠國ではあるが仕方がない、足手纏ひになる家族を是に擇さんとしたが、若しや道中に長の日數を費すことゆえ、其の間に一擧が斷行されてしまふかもしれない、其の時には折角の苦心も水の泡となる恐れがあるので兎やせん角やせんと思つた擧句、意を決して遂に同志の人に、

「家族があつては足手纏ひゆゑ、是を緣者のもとに送り屆けんと存ずるが、生憎奥州は白川の遠きに居るので、如何はせんと存じたが、今より此處を出發仕

つて彼地に赴く事にいたしておざる、ついては甚だ御面倒ながら、一擧の次第萬一にも急になりまするやうの事おざらば、長の道中ゆゑ、不幸にして討入の間に合はぬやうなこと出來いたすやも計られず、誠に以て必許なく存ずれば、若しか左樣な場合にも相成らば、是非〳〵急使を御立て下されて、御一報に預りたい」

とくれ〴〵も依賴して、遙々奥州路さして下り行いた。そして無事に其の家族を送り屆けた上更に引歸して江戸表へ來つた、時に十四年の十月であつた。以來彼は新麹町四丁目に自ら一家を構へて、山彥嘉兵衞といふ變名のもとに、儺家の動靜を探索しつゝあつた。一說に依と、彼は其の間扇賣りの行商となり、客の好みに任せて、俳句、畫などを書いて興を添へながら、吉良家の長屋下を日々賣り歩いたといふ、そして一日、家中の某といふものゝ家で商ひをしながら態と急病に罹つた風を裝ひ、其の場に引つ轉倒つたので、某は大きに驚き、彼を其の家

に連れて行つて殊勝にも看護して呉れた、彼は其の間に充分四邊の樣子を見屆けこれなら好しと時分を見計つて、病氣が癒つたやうに見せかけ、厚く禮をいたして其の場を引下つたといふことが傳へられてある、勿論、眞僞はいふまでもなからう。しかし其の讐家の動靜に非常な努力をしたことは、もとより確かである、これは今更敢て此處にいふまでもない。で其の最後は一黨と同じく十六年の二月四日、久松家に於て行はれた、介錯は大島半平、法號を「及露白劍信士」といつて、行年四十五歳であつた。

菅谷半之丞政利

知行百石、馬廻兼代官を勤め居たる菅谷半之丞政利は同苗半兵衞の子、其の幼時、名うての美少年であつたので、内匠頭の御小性として召出されて居たが、父半兵衞の後妻として菅谷家に入つた婦は、不幸にもなか〳〵の淫婦であつた爲

め、何時か政利が姿の美しいのに思をかけ、心のたけを細々と書綴つては理不盡にも政利を口説いた。政利はあまりのことに、心中大いに憤りを覺えたが、人にいふべき事でもないので、一人思案に暮れた果、今は是非なしと思つたものか、少しも自分の家には歸らず、御殿に宿るとか、又は朋輩の家に夜を明すとかして一途に義母の眼を避けてゐた。然るに道に外れた事をするやうな女のことゆゑ、政利が義母は是を見てテツキリ自分を嫌つてのことと、却つて父半兵衞に半之丞が身持放埒で外にばかり止宿するといふので、種々事惡しざまに告口した、それがために、政利と後妻との間柄はます〳〵不和になつて、遂には後妻の勸めで父半兵衞から政利勘當の願ひを差出すといふことになつてしまつた。併し流石は明君の内匠頭ゆゑ、小性の半之丞にそんな不埒はないとよく知つて居られるので、容易にお取上がない、すると後妻は是を頻ともどかしがつて、二度三度、半之丞勘當願を差出したので、内匠頭もさう〳〵は握り潰してばかり居る譯にも往かず

或る時半之丞政利を傍近く呼んで、

「半之丞、これを見よ」

と勘當願の嘆願書を見せた、半之丞是を手に取上げて見ると、有らうことか有るまいことか、一つとして自分に覺えのないことのみが書き連ねてある。

「半之丞、申譯あるか、何うぢや」

殿にいはれて半之丞、ありませぬと答へんとしたがイヤ待て暫時、茲で今、自分が若し言譯をすれば、嘘を書き連ねた此の願書父半兵衞が腹を切らねばならぬと氣がつくや本來親思ひの半之丞政利、默然として差俯いて居たが、やがて心を定めたものか、

「申譯はおざりませぬ」

とキッパリ言ひ放つたので今は殿も仕方がない、

「ナニ申譯がないとな……ウム是非に及ばん、勘當いたす、左樣心得よ」

と、哀れにも半之丞政利、茲で勘當の身の上となつたので、戻ながらに屋敷を立出で、身の落付を篤と考へた末、遂に江戸表へと下つた。其の勘當のみぎり、殿から一朝事あつたるときは直ぐに驅つけるやう、其の節改めて勘當をゆるすと言はれたのを切めてもの慰めとして、江戸は芝口三丁目、もと淺野家出入りの魚屋金六なるもの、世話で手習師匠を始めた。すると宜い都合に弟子が一人殖え二人殖えして、次第に盛んになつたので、足らぬながらも其の日〳〵の暮も立て行けるやうになつた。然るに此の半之丞政利、前にもいつた通り、なか〳〵の美男なので、何時か町内中の大評判となつて、夕方なぞ半之丞が湯にでも行かうと思つて家を出ると、近頃隣から女達が皆首を出して見送るといふ風、色の白い所に黒羽二重五つ紋の衣類、献上博多の帶を締めて紹鞘の大小を差し、脊の高い駄下駄を穿いて路次を出る所は、男も振向いて見るやうな風姿、近所の娘達は手習の先生がモウ八つになるからお湯にいらつしやるだらうと、路次口に押寄せるばか

りの評判。此んな馬鹿な時代もあつた。

「お嬢様、今お窓下を手習師匠の菅谷半之丞様がお通りになりますよ、一寸御覽遊ばせ」

地主の娘でお徳といふ今年十七、それが噂さには豫て聞いて居るが未だ見たことがない、乳母に呼ばれたので、何んな男かと窓際に寄つて來た、格子の内には簾が下りて居て、外から此方は見えないが、内からは能く見える。半之丞は然うと知らないから、

「好い鹽梅にお天氣に相成りまして」

と乳母に挨拶してズツト行つて仕舞ふ、娘は自分の顔を見て挨拶されたものと思ひ、思はずハツト顔を赧らめて胸をドキつかせた、しかし傍に居た乳母は、氣がつかなかつたものと見え、

「一寸お嬢さん、好い男ぢやアございませんか、役者は作り者でございますが

木無垢で好い男といふものは澤山ないものでございますよ、何とか仰しやいまし、私にばかり口を利かして……下を向いてクス〳〵笑つて居らつしやる、貴嬢どうか遊ばしましたか、あれ袖口を上と下と一緒に縫ひつけると手が出ませんよ」

などゝ云つて居た時分は未だ宜かつたが、それからといふものは此の娘、五日十日三十日と次第に日柄が經つに從ひ、何となく一人物思ひに沈んではホツト嘆息ばかり、夕方になぞなると、緣の柱に寄り掛つてはシク〳〵泣いて居る、其のうちにそれが止んだかと思ふと、今度は物を食さなくなつて、果はドツと枕につくやうなことになつてしまつた。サア斯うなると娘の親父、これが又なか〳〵の子煩惱と來て居るから其の心配といふものは普通一通りではない、早速醫者を呼んで見て貰つたが分らない、尤も是ばかりは、お醫者様でも草津の湯でも、戀の病は癒りやせぬと相場が定つてゐるのだから無理もないが、娘の親父さん心配で

堪らない。そこで今度は醫者を取り變へて見て貰ふと、其の醫者殿自分に經驗のあつたものか、或は又氣轉の利いた人なのか、兎も角もハア、と膝を打つたので親父さんが何病でと聞くと、

「これは所謂戀煩ひといふものだ、何うも脈へ出ぬ病だから、失禮ながら今迄の醫者に分らなかつたのでせう、で是を癒すといふには、斯うと思つた人に添はしてやれば直ぐに利目があります」

とのことで、ヤレ〳〵と安心は安心したが、眞逆に是は親父が娘に向つて手詰の談判、誰れに惚れたと聞く譯にはいかぬ、乳母なら腹藏なく話しをするだらうと、此處で乳母に内意を含めて娘の枕元へやり聞かせることにした。乳母は委細を承知して、娘の許へ來り色々と話をして居る中に、何氣なく菅谷半之丞の噂を初めた。すると靑醒めて居た娘のお德が、俄かにポーッと顏のあたり紅葉を散らして、

「お前のおいひの通り、半之丞樣はお柔しいねえ……」

黄八丈の袂を喰へて、淋しい笑をニッコリ、眼の中には哀れ戀の悶えが溶けて流れて涙の一滴、ハッと其の儘差俯向いてしまつた。乳母も此の樣子を見て、早速親父の前へ出で、

「分りましてす」

「分つたかい、それは御苦勞〳〵、して相手は惡いか善いか」

「ハイ、御地面内に居ります菅谷半之丞樣でございます」

「なるほど然うかい、無理はない、實は俺も惚れた」

「御冗談ばつかり、でも能く戀病ひをなさいませんでしたね」

「馬鹿をいへ、俺まで戀病ひをして堪るものか、何しろ魚屋の金六を呼びにやつて呉れ」

そこで直ぐに金六がくる、

「御免くだせえ」
「イヤ金六か、大分早かつたな」
「へー、して何か御用で……」
「外ぢやアないがな、お前も知つてるだらうが實は娘の病氣に就いて……」
「ナ、成る程、お嬢さんの御病氣といふこたア知つて居ましたが、まだお見舞
にも參りませんで……へイ、それでも未だ息がおありなさるんで」
「オイ金六、それは何といふ云ひ方だ、未だ息があるかなんて……」
「へイこれやア何うも」
「で漸く其の病氣の原因が分つたのだ」
「なるほど、菓子でも食ひ過ぎましたかな」
「まアさ、默つて聞いてゐなさい、で其の病氣の原因が分つて見ると、お前で
なければならないのだ」

「へー」
「それでだ、お前がウンといつて呑込んで呉れなくつちやア困るんだが、何う
だい」
「へー、ですが旦那、唯呑み込め〳〵と仰しやつたつて、品物が分らなくつち
やア呑み込めませんからなア」
「それやア道理だ、今まで其の品が分らなかつたが、漸く今日分つたのだ、そ
れといふのは他でもない、戀病ひだ」
「ハテね」
「で戀病ひと極つたらお前でなけりやアならないと事が運んぢまつたのだ、そ
こでお前を呼びにやつたんだがね」
「なるほど、そいつア剛義だ、有難え〳〵早速嚊は離緣しちまいます」
「お前の女房さんに離緣をやつて何うするのだ」

「何うするつたつて、お嬢さんが小哥に戀病ひをなすつたんでせう」
「馬鹿をいへ、誰れが貴樣に戀病ひをするものか」
「ホイこいつア間違つたか」
「其の相手といふのは他でもない、お前が世話をして連れて來た、彼の菅谷半之丞樣だ」
「なるほど」
「何うか家の聟にしたいんだが、何うだいお前先方へ行つて一つ好い工合に話をして當家の聟になるやうに骨を折つて見ては呉れまいか」
「宜うがす、やつて見やせう、屹度二つ返事でハヽッと來ますよ」
「サアそれが然う旨く行けば宜いが……兎も角もお前行つて話をして呉んな」
「宜うがす、受合ひやした」
と金六は直ぐに地主の家を飛出して半之丞の處へやつて來た。

「エ、御免ない」
誰れかと思つて半之丞、出て見ると金六なので、
「イヤそれは〳〵金六殿、まづ何うぞ此方へ……」
「ヘイ有難うがす、しかしまア何しろお目出たうがす」
「有難うおざる、お蔭を以てまづ〳〵弟子も殖えましてな」
「イヤお師匠さん、弟子が殖えたばかりぢやアねえ滅法目出度んだ」
「ハヽー、目出度〳〵と申されるが一體何事でおざるかな」
「なにごとも成ほどもねえ、地主の娘のお德さんといふなて今年十七の素的な別嬪だ」
「それで……」
「その娘が戀病ひをやらかしたんだ」
「なるほど、それは氣の毒千萬で……」

「コウお師匠さん、氣の毒千萬だなんて氣樂なことを云つてらア、お前さんに戀病ひをしたんだぜ」

「イヤ是はしたり、怪しからんことで」

「ヘン怪しかるも締瓜もあるめえに、笑はしちやアいけねえ、本當にお前さんへ惚れこんだのだ、今地主の旦那に受合つて來たんだから、ウンといつて聟に行きなせえ、惡いことアいはねえ」

「イヤそれは添けなふおざるが、拙者は故主へ歸參の望みがおざる、ちやによつて先方へ聟に參つて家督を相續いたすと、故主へ歸參の叶ひたる砌、大きに都合の惡いやうなことが出來いたさぬとも限らぬ、さすれば誠に拙者迷惑いたすやうな次第、甚だ心苦うはおざれど、此の義宜しくお斷りを願ひたい」

「ナ、なるほど、しかしそんな小六ケ敷ことは拔きにして諾と言ひなすつちやア如何で、私も貴郎の前だからですが、決して行く先々に惡くはあるめえと思

ふんだが」

「イヤ其のお心入れ、拙者甚だ有難くはおざれど、今申したやうな次第ゆえ、如何にも他家の家督を相續いたすといふことは出來ませぬ」

「そんなら何うすると云ひなさるんで」

「誠に勝手な申分ではおざるが、嫁にならぬ貰ふでおざる」

「ぢやアこれほど小哥がいつても、聟にやアならねえといふんで」

「左樣」

「どうあつても」

「左樣で」

「あれだけの財産を棒に振つても」

「勿論でおざる、富貴は浮べる雲のそれでおざるからな、身如何に貧なりとも……」

「勝手にしやアがれ」

短氣の金六、半之丞のいふことが分らなくなつたものだから、プーイと家を飛出し、ブツ〳〵いひながら地主の家へ歸つて來た。此方は待ち兼ねて居たお德の親父、

「ヤレ〳〵御苦勞でした、して何といひましたな」

「なんといひましたつて旦那、何うも七六ヶ敷ことばかり並べ出して……」

「いづれ然うであらう、何ういふことを言ひました」

「ヘイ、それが……チツと待つてお呉んねえ、エ、と……先方さ……先方で、先方がカメさ……カメがチン〳〵すると……」

「それやア何の話で」

「さうすると饅に中りまさア、そこで胡椒を買つて食ふといふやうな譯で……どうか濟ねえがお斷りなすつてといふんで」

「何だかサツパリ譯が分らない」

「へー小哥にも分らねえので」

「それぢや斯ういふんだらう、先方で家名を相續すると、故主に歸參の叶つた曉に、都合が惡いからといふんだらう」

「それ〳〵、その通りに違へねえ」

「なるほどそれは道理だ、迚もお前には分るまい、人を代へてやりませう」

それから分る人を遣つて聞いて見ると、嫁になら貰はふといふので、その事を娘のお德に話すと是は何方でもと、病氣はケロリ全快してしまつた。そこで改まつて嫁入といふと、先方が迷惑をするといふ所から、言はゞ客分同樣にして、吉日を選び半之丞方へ遣ると事が極つた。やがて家内だけの祝言も濟んでそちこちして居る中に、早くもお德は酸いものを好くやうになつた、その内に臨月となつてギアツと產れたのを見ると男の子、兩人は大喜びで早速七夜になると舅を呼ん

で、

「今日は名前をつけねばなりませぬが、私の父は御承知の通り半兵衛、私は半之丞、よつて伜は半の下に何かつけねばなるまいと存じまする」

「なるほど、六ヶ敷ものだの」

「左樣でおざりまする、なか〳〵面倒なもので」

「して見ると半太郎かな、惣領だから」

「私も左樣に存じましたが、半太郎では何うも讀聲が惡うおざりまするによつて、他に何か好い名前をつけたいと存じ、彼れや是れやと思つた末、半吉といたさうと存じまするが如何なものでおざりませう」

「半吉か、それは宜い、大吉は凶に返るといふから半吉の方が宜い」

御闕と間違へて居る。

這へば立て立てば歩めと親心

我が身につもる老を忘れて

半之丞お德の兩人は只管伜半吉の成長を樂んで居る。折りから丁度元祿の十四年三月十四日、半之丞は用事あつて芝口三丁目の自宅を立出で、久保町から新し橋を渡つて門内へ入らんとする時しも

「避れ〳〵〳〵」

といふ嚴重なる制し聲、見ると物頭、中小姓、及び徒士足輕以下百人ほどの同勢、銘々袴の股立を取つて大刀の反を打ち、拇指が刀の鍔に掛つて居る、その一隊の中央に網の掛つて居る駕籠が一挺、いはずと知れた罪人護送の道すがらである。そこで半之丞は傍へ身を寄せながらヒヨイとその駕籠を見ると、所謂蟲が知らせたとでもいふのであらうか、何となく妙な氣になつて、其の列の後からゾロ〳〵ついて來る見物人に向ひ、

「これ町人、今のお駕籠は一體何誰ぢや」

「何だか小哥も聞いたばかりでごぜえますが、今殿中で大名と旗下が喧嘩をしたんださうで」

「ナニ喧嘩だと」

「へー、大名と旗下とがやつたんださうで……」

「ウム、して何うした」

「なんでも此の平素から大名がいひこめられて居たんださうで、そこで今日殿中で二言三言いつてる中に大名の方が氣が短かつたと見え、突然斯ん畜生と小さい刀を拔いて打ッた斬つたのださうですが、可哀さうに大名は其の場で直樣大勢のために取捕へられて、あの駕籠で今田村樣のお屋敷へお預けになるんだとかいふことです」

といふのを聞いて半之丞、それは一大事だ兎も角も事の事實を確めやうと、其の一隊の列について行くと愛宕下田村右京太夫の不淨門がギーと開いて、それへ

駕籠が這入ると、ドーンと閉つてしまつた。

「御門番、御門番」

「何用か」

「唯今これへ這入つたるお駕籠は何方のお方で……」

「アレは播州赤穂の城主淺野内匠頭殿だ」

「さては……御門番、甚だ立入るやうではおざるが、如何なる次第にて彼のやうな御身の上になられたのか、卒爾ながらお話し下され」

「それは斯樣でおざる、今日淺野内匠頭殿は、傳奏饗應使お師匠番吉良上野介を殿中に於て斬着けたる科により、當家へお預けと相成られたのでおざる、聞けばお氣の毒にも、是より當家に於て御切腹仰せつけらるゝやうな噂、如何にも御不憫な次第でおざる」

半之丞是を聞いて胸を打ち慟哭すること暫時、悄然として沈思默考、踏む足の

運も物悟げに我家へ立歸り來ると這は又如何に、長屋の者が上を下への大騷ぎ、自分の家は引轉り返るやうな騷だ、何事かと思つて奥へ來つて見ると女房のお德が冷たくなつてゐる。

「ヤ、是は……」

いつたが二の句が出ない、泣いて居た婆やが話によると、伜の半吉を抱いて居たが急に心持が惡くなつたといつたぎり、其の儘冷たくなつたので、周章て醫者を呼んで來て、見て貰つたが既う駄目だとのこと。重々の不幸に半之丞は途方にくれて、暫らくは茫然として流石に其の爲す處をしらなかつた位ゐ。そこで早々女房の葬式を營んでやつたが、氣に懸るは國表の故主がこと、今は片時たりとも猶豫して居る時ではないと、急に旅の支度もそこ〳〵に、我家を引拂つて出立しやうとしたが、何といつても足手纏ひなは伜の半吉、是は何うしたものか、伜を地主の隱居に預けて行けば宜いとはいふものゝ、女房が死んで直ぐさま離緣同樣

暇をくれろといつても、必ず後々に便る人がないからと許しては呉れまい、仕方がない、心苦しい次第だが茲は默つて出るより他に道はないと、夜逃同樣、伜の半吉を十文字に脊負つて、貰ひ乳をしながら播州は赤穗を指して旅立つた。

乳貰ひの隣に遠き山が家は
あはれ牡鹿の子を連れて啼く

見る目も哀れな其の樣をして菅谷半之丞、夜の明くるを待遠に晝の暮るゝを惜しみつゝ足を早めて故郷遠き赤穗へと乘込み來つて見れば、城下は火の消えたやう、暗憺たる有樣に先づ膽を冷しつゝ、城下なる知る邊の人を訪れた。

「お賴み申す、お賴み申す」

「是は〳〵、菅谷の若旦那半之丞樣、お珍しい、能くまア お出でになりました見ればお子樣を負つて居らつしやるやうでござりまするが、御浪人中お出來になりましたか、イヤそれは〳〵お目出たい事で、サ、兎も角もお上りなすつて

といつて居る處へ其の家の女房も出て來て、

「まア菅谷の若旦那樣でいらつしやいますか、お珍しい、オヤお子樣が、まア〳〵それはお目出たうございまする、して奧樣は……」

「イヤそれがな、先達歿しましておざる」

「それはまア飛んだことで、ではお後からお乳を上げる乳母でもいらつしやるので」

「お耻しいが其の手當もなく、貰乳をしながら漸く當地まで參つておざる、實は甚だ勝手ながら、男と見掛けてお賴み申すのでおざるが、如何でおざらうか一ッお聞濟になつては下さるまいか」

「何ういふ事か存じませぬが、お屋敷には種々と御厄介になりました私、決して御遠慮なく仰しやいまし、出來るだけは御用もお勸めいたしますから」

「それは千萬忝じけない、ではお言葉に甘へて申上げるが、願はくば暫時の間

是なる伜をお預り下さるまいか」

「なるほど御道理な事で、ヘエおやすい御用でござりまする、決して御心配には及びません、幸ひ手前の女房も、つい先頃乳呑を亡しまして、乳が張つて困る〳〵と申して居りまするやうな次第……オ、女房、坊ちやんを取つて上げな、親子とは言ひながら、能く似て居らつしやるぢやアねえか、何うだい、あのパッチリと目を開いて居なさる處なんざア、親御樣そつくりだなア……エ、決して御心配あそばしますな、確かにお預り申します、しかしまアそれは兎に角お上りなすつて、そこでは何でございますから、サ何うぞお上りなすつて、お別れ申しましてから、積る話が山ほどありまするので、何れから話して宜いやら、兎も角もまアお上りなすつて……」

「イヤそれは誠に忝じけなふ存ずるが、この足にて一先づ御家老の處まで行つて參るほどに、何卒後の處は宜しくお賴み申すでおざる」

と、此處で半之丞政利、久方振りで城代家老大石内藏介の許を訪ふた處、何がさて長い間の音信不通、流石の内藏介も半之丞の心底如何と見極めることが容易でない、そこで途方もない事をいつて其の場を逃げ、密かに政利の爲す樣子を見て居る。然るに此方は半之丞政利、折角幾多の艱難を凌いで赤穗まで來つて見れば、便に思ふ内藏介が武士にあるまじき心の中、此の上は仕方がない、潔よく腹掻切つて泉下の君が許へ御供仕らうと、伜半吉を預け置いたる處へ歸り來つて哀れにも無心の幼子半吉の胸元深く氷の刄、返す刀に今し我れと我が腹掻切つて失せんものをと、血に染んだる一刀取り直す時しも内藏介の命を受けて此の家に入り込み樣子を見て居たる同志の一人、

「ヤレ早まるな半之丞殿切腹は無用でおざるぞ」

と、茲に初めて義盟の一員として加へられることゝなつたといふ。是は菅谷半之丞政利の俗傳であるが、兎も角も彼は凶變の起るや、主として同盟の一人と

なり、同志の士と共に籠城の決心固かつた一箇の武士であつたのである。既にして其の議一轉再轉遂に復讐と事定るや、半之丞乃ち暫く其の跡を韜晦に附して時機を待たんとした、彼に岡本松之助といふ兄があつた、又其の姉は八田彌助といふ人の許に嫁して、共に俱に三次といふ處に住んで居つた、此の三次といふ處は内匠頭長矩の内室瑤泉院の生家淺野土佐守長澄の治所であつて、尾道から十四五里の場所、半之丞はそこで此の兄と姉とを便つて、三次川の對岸なる寺戸といふ山の麓、甲斐谷の甲斐庵といふに身を寄せて、密々同志の士と心を通はしながら隱れて居た、それも唯居つたのではない、彼は態と耳が聞えぬ風をして、おまけに跛を裝うて居たのである、そして爲すこともなく、毎日々々一本の釣竿を手にしては三次川の清流に日を送つて居た。そればかりではない、彼はあるだけの錢を以ては酒に代へ、絶えず熟柿のやうな息を吹いて、其の身の樂みとして居た。その初めは多少の貯へもあつたのであらうが、何時しか遣ひ果たして今は一錢の

錢もなくなつてしまつた、そこで彼處此處から借りられるだけは金を借りて來て飲んで居た、それとても、期限が來ても敢て金を返さうともしない、貸しさへすれば幾度でも貸りやうといふ風だから、遂ひには誰一人半之丞に金を借さうとする者がない、道を歩けば惡たれ共が、聾を好い事にして跛者よ醉漢よと惡たいを吐く、併し半之丞は結句それを機にして日毎〳〵の遊び歩き、少しも意に懸る樣子を見せない。その中に一年ほどの年月は夢のやうに經つて、明くれば元祿十五年の或る朝まだき、三次川の畔には跛者も見えねば醉漢も見えず、甲斐谷の甲斐庵には酒の香も今朝は何處へやら、半之丞の姿は忽然として、霧は霽るゝに再び現はれなかつた。遇々近所の人の他處から歸り來つた者があつた、其の人のいふには、

「此處から三里ほど先の處で、菅谷の旦那樣に會つたが實に不思議な事もあればあつたもので、彼の跛者で聾の旦那が、私の顔を見るや叮嚀に挨拶されて行

かれた」

と、不審の面持して遭ふ人毎に語つたといふ。そこで半之丞の兄なる人が不思議に思つて、甲斐庵に行つて其の居間を調べて見た所金を借りた人達の名前から其の金高まで一々書き記して、返濟の金まで取揃へてあつたので、流石は彼の兄とも云ふべき人ほどある、

「さては大望のあつてか」

と茲に初めてそれと悟つたといふことである。

さるほどに其の年の十月、半之丞は内藏介等の一行と共に江戸を指して下り、町人政右衞門といふ觸れ込みで石町三丁目の小山屋彌兵衞方に移り住むことゝなつた。斯くて彼は敵情偵察の任務に專ら心力を傾注して、幸なる哉、其の年十二月十四日、梟敵上野介の首を擧げ得るや、大石主税等九人の人々と共に久松家へ御預となり、翌年二月加藤斧右衞門が介錯にて美事四十四歳の忠烈なる一生涯を

終つたのである、彼れ法號は「刄水流劍信士」。

早水藤左衛門滿堯

元和元年、關東大阪互に其の鋒先を爭ひ居つた時分、備前の國岡山の城下に茶屋新五郎といふものが居た、其の弟を四郎兵衛といつて、池田宮内少輔忠雄に從ひ、合戰場裡に何か一かどの手柄でも立つたものか、御扶持を下されて町人頭に仰せ付けられた。其の三代目の子に、四郎右衛門、四郎兵衛といふ二人の兄弟があつた、弟の四郎兵衛は、人品骨柄卑からず、器量通常ならぬ樣子に、早くよりして人々の話に上つた男であつた、それが何ういふものか、家業の茶屋を厭つて、日々劍術又は槍術などいふことにのみ精を出すので、兄の四郎右衛門が度々意見をしたが、いつかな聞き入れる樣子もないので、是非なく是を勘當してしまつた。處が弟の四郎兵衛、其の勘當を却つて悅び、彼處此處と劍術槍術の道

場を廻り廻つて、遂に相應の腕前となつた。その頃赤穗に長野彌兵衛といふ劍術の名人があつた、今は年も老つたので名を退翁と改め、專ら一家中の師範をして居た。四郎兵衛その評判を聞いて、自分は今此の備前の家中で、手に足る者もないほど劍道に達したとはいふものゝ、まだ他國の名ある人に接したことがない、これはなんでも今名ある劍道の遺手を打込んで、何方かの藩に住みこむやう、一かどの武士になりたいと、早速赤穗へ出向いて長野退翁が屋敷へ立越え、案内を申入れた。退翁も豫て聞き及んだ四郎兵衛のことゆゑ直ちに面會した處、

「拙者は坂越にある浪人者、豫て退翁の御名を承り及び、御太刀筋のほど拜見仕り度く、斯くは推參いたしておざりまする」

と四郎兵衛が不敵な面魂で言ひ出でた。しかし何といつても未だ井の中の蛙上には上がある世の中であるから、退翁それを何とも思はない、莞爾と笑ひながら、

「さて〳〵御邊は逞ましいお志ではおざるが、惜しいかな、民の生れ、試合の儀は如何やうにもいたすでおざらうが、御邊の心底そも武士になりたくて、斯く御越しになられたのでおざるか、又は藝術の道を立つて一生浪人にて暮されうとの思召しか、茶屋は天下の町人頭なれば、誰一人として知らぬものもなく、御邊は其の家より出でられたる事なれば、藝道も其の名と共によう聞えて居る、これが一通りの民であるなれば、人知れず出世もならうが、町人とはいへ筋目宜しき家柄の貴殿、包むとすれど自ら知らるゝの譬で、なか〳〵に人の目につきやすい、然しながら御邊が骨柄は、天晴れ武士と見へておざれば、試合を廢めて拙者が門弟となられては如何でおざる、さすれば末々は及ばずながら此の退翁が、武士となるやう、隨分御推擧申さうでおざる、又武士となるが本意でないと仰せられるならば、藝道のみの御心掛として、只今試合をいたすでおざらう、何れなりとも、御邊がお心のまゝになされい」

と意見をした。四郎兵衛もこれを聞いて、

「御道理なる御一言、心根に徹しておざりまする、諺にも、花は櫻木人は武士とやら申しますれば、武術を嗜む拙者、豫て仕官の望みおざりますれど、仰せの如く賤しき町家の生れ、それゆゑ淺はかにも、音に聞えし貴殿を仕付けたことならば、武士の師範とも相成り、あはよくば、何處へかの勤仕も出來やうかと存じましたる次第、今更何とも御詫の申しやうおざりませぬ、此の上は何卒御門弟の一人になし下されまするならば、有難き仕合におざりまする」

と、茲で四郎兵衛が長野退翁と師弟の約を結んだ。其の中に彼の腕は次第〳〵に上達して遂には退翁が代稽古をさへつとめるやうになつたので、退翁も大喜び折があつたら四郎兵衛を何方へか推擧しやらんと心掛けて居ると、或る日赤穂の城代家老大石内藏介が、長野退翁の處へ訪ね來たので、是れ幸ひと早速四郎兵衛のことを話込み、

「彼を御召抱へて置かるゝならば、行〳〵御用にも相立つこと、必ずおざらうと存ずるが如何でおざらう」

と勸めた。ところで大石も是を聞いて非常に喜び、さういふことならば早々彼の系圖親類書を出すやうにとのことで、退翁は斯くと四郎兵衞に告げた。彼は大いに喜んで、備前の家中早水藤太夫といふものとは別懇の仲ゆゑ、是々斯々の次第だがと、此の事を賴んだところ、それは何より結構なことだ、早速其系圖親類書を出したら宜からうと得心したので、そこで更ためて藤太夫の從弟と書出し、早水藤左衞門と名乘つて、十人扶持を頂き、内匠頭に事へることゝなつたといふ藤左衞門についての履歴がある。もとより俗書にあることだから當にはならないしかし彼が强弓の達人であつたといふことは爭はれぬ事實である、そして祿百五十石を食み、馬廻に列せられて居たといふのも確かである。

主家凶變の際、彼は江戸表にあつて主君に扈從し、鐵砲洲の藩邸に居つたが、

主君刃傷の報が一度傳はるや否や、卽刻萱野三平と共に、其の凶變を國表へ注進すべく、第一の報告使として出發した、以來赤穗に留つて、籠城殉死復讐と藩論は時々變更したにも拘らず、常に其の同盟の列について居た。

既にして一藩離散の悲運に遭遇するや、彼は十五年の十一月、内藏介が東下するに從ひ同じく江戸に來り、曾我金介などゝ變稱して、讐家の偵察に盡瘁して居たのである。

其の討入後、引揚の際に、彼は吉良家の長屋〳〵を見廻りながら、萬一を警戒しつゝも、餘りに容易く復讐の一擧を終へたので、聊か物足らず思つたものか、敵が潛んで居さうな處と見れば、片ッ端からボッス〳〵と弓末を突込んでは、ガラ〳〵中を搔き廻して、

「我等は唯今上野介殿を討取つて立退く處であるぞ、主を討たれて無念と思はんものあらば、疾く〳〵出でゝ勝負いたせ」

と哦鳴りたつたが、誰一人出會うものがない、彼は其の不甲斐ないのに愈々業を養やし、折柄幽かに燈火の光りが見えすいた一軒の敵衆が住居を見るや、得意の强弓に征箭打ちつがひつゝ、

「早水藤左衞門滿堯、一矢を參らせる」

といひざま、兵弗とばかりに矢つぎ早の二箭、プスーリプスリと射込んだといふ、彼が驍勇な性質としては然もあつたらう。

彼の辭世は

地水火風空のうちより出でし身の

たどりて歸るもとのすみかに

といふ大分悟りを開いたやうな一首、其の介錯は、細川家の家臣魚住惣右衞門といふ侍で、行年丁度四十歲、法號は「及破了劍信士」といふのである。

前原伊助宗房

淺野内匠頭に事へて、十石三人扶持を食み中小姓にして金奉行を兼たる前原伊助宗房は江州坂田郡前原村の出、漁夫伊平なる者の子である、幼い時分より、所謂「習ふよりは慣れろ」で、暇さへあれば裏山の竹をば切り出しては槍を造へ、琵琶の湖水に於て鮒突きを遊びとして居た、夫がため、自ら其の妙を得來つたが年若くして、伊井掃部頭の祈願所圓通寺の門内にて、誤つて人を殺めた科により根が正直の伊助、即刻これを代官に訴へて、罪を受けんとした時に、止むる人あるに任せ、國表をば出奔して江戸に來り、緣あつて築地鐵砲洲の淺野家へ、仲間奉公に住みこんだのであつた、是が抑々伊助の淺野家へ隨身した事の始である。

伊助とても、いつ〳〵まで仲間奉公をして居るやうな氣はない、出世の緒發見り次第、其の階踏み外してなるものかと、骨身を惜しまず働いた三年目、丁度正

月の十三日のこと、多くの仲間共は、皆一同何處ともなく遊びに出で去つて伊助只一人、室の内にゴロリ横になつて寢んで居ると、其所へ入り來つた部屋頭の吉藏といふ男、

「オイ、伊助……伊助」

肩を押へて呼ぶ聲に、目を醒した伊助、

「オ、これやア部屋頭、なんか御用でもありますかね」

「ウム、ちつと用が出來たんだがな、今玉蟲の御新造がお出でなすつて、青山穩田のお屋敷へ行つてくれといふお頼みだから、一ッ御苦勞だが行つてくれねえか」

「フム、青山へお供か、そいつア御免蒙らうよ」

「ナニ……」

「可厭だつてことよ」

「何故可厭だ……」

「何故でも可厭だ」

「そんなこと言はずに行けつてえことよ、百七十二文になるぜ……」

「幾らになつても厭だ」

「仕様がねえ奴だな、こう伊助、後生だから、一ッ頼まれて呉れつてことよ」

「ウム、仕方がねへや、後生だつてんなら行くとしやうよ、併し部屋頭、私が槍を持つて、お前さんが合羽籠を擔ぐてえなら、行つて參りやしよう」

「此の野郎、部屋頭が合羽籠を擔いで、仲間が槍を持つてくなんて、見つともねえや」

「そんなら止めやしようよ、他の奴等ア、今日は休みだつてんで、方々放浪そつて遊んでるに、私ばかりが此の雨降に……」

「まア理窟は云ふなつてことよ、仕方がねえ、俺が合羽籠を擔いで往くとしよ

う」

と、部屋頭の吉藏、澁々合羽籠を擔いで、築地鐵砲洲輕子橋の淺野の屋敷を立ち出で、番頭玉蟲七郎右衛門の供をして、やつて來たのが青山穩田道、然るに此の玉蟲七郎右衛門、馬に乘つて供を連れた所は宜いが、土臺武に不鍛錬の彼、如何に乘り下手とて、是は又沙汰の限り、武士たるものが、勘定役番頭とて泰平の世なればとて、不用意も亦極つた事である、鞍上人なく、鞍下に馬なしといふ腕前は、もとより玉蟲の樣なものに望むは無理であらうが、さりとて唯鞍につかまつて居たにした所で、たかが鐵砲洲より青山までのこと、君公も君公、日頃玉蟲が技倆しろしめさぬ事も無からうに、今日の此の御用、御使として行く玉蟲七郎右衛門、間拍子の狂ふ時は仕方のないもので、唯さへ腰拔武士の七郎右衛門、馬上で早疾くの昔、上氣して居る、人事不省である、傍についた若黨の小作、獨り氣を焦つて居たが、相手は動物、睨みつけても感じがない、なまじひに、尻の

一つも打たうものなら、それこそ大變、竿立ちにでもなられた日には、主人の玉蟲は眞逆樣に落ちるは必定、心配でもある、齒痒くもある、往來のものは、聲こそ立てね、嘲り笑つてすれ違ひ行く口惜しさ、忠義の小作は涙を浮べながら、齒を食ひしばりつゝ、馬の右手について業を煮やして歩いて居る。

昨日の雨は、漸う止んだが、空は一面に機嫌惡く、風が止めば雪になるは唯なら天文、道は泥濘つて、上が凍りつくやう、足の皮を切られるばかりの苦しさに、吉藏は今更伊助に對して、氣の毒と慰めやうもなかつたが、不圖胸に浮かんだ防寒の奥の手、

「オイ、伊助、今日は眞實にお前に對して俺ア濟ねえ、無理に賴んで來て、こんな目に合せたは惡かつた、しかし俺も、旦那が眞逆あれほどでもあるめえと思つて、全體馬のお供てえやつは、寒い時には滅法暖かなもんなのだが、如何も斯う時間が費れては往生だ、青山まで行かねえ間に、是ぢやア凍え死になる

かも知れねえ、一寸いつもの所で、五合許やつて、勇氣をつけた上、出掛けやうと思ふが、何うだい、何あに見や、あれだもの追付くのは譯なしさ、若黨さんには氣の毒だが、命にや替へられねえと云ふ奴さ、はゝ、何うでえ伊助」

「そいつぁ頭、有難えがあんまり酷からうぜ、主人を先へ放つたらかして、お供が酒を飲むなんて、それに第一、あんなへまな人だから、間誤でも出來た日にやあ、若黨さん一人で、何うする事も出來やあしねえから、まア頭、歸つてから悠然飲むことにして、務める所は務めつちまつちやア何うですえ」

「それやアなるほど、お前の云ふなア、毎も尤もだが、立飲み五合許、何の手間暇が懸ることかい、さう〳〵、云つてる間に、もう來たよ、さゝ早く飲つて一息つかふぢやねえか」

一せんめし、御酒肴、有合、中汲と障子にかゝせて、繩暖簾の居酒屋といふもの、一休和尚に極樂と銘を打たれたゞけ、玆が仲間小价の龜清とも、八百松とも、

まつた紅葉館精養軒ともいふべき所、幸ひ合客もないので合羽籠擔いだまゝ槍提げたまゝ、暖簾を潜つた兩人。吉藏は氈へながら、

「オウ、爺さん、ウ……隨分と寒いぢやねえか」

「ホイ、これは誰かと思つたらお珍しい、部屋頭ですかい、見れば御供の歸りのやう何所へお出になりやしたね」

「何あに、爺さん、お歸りぢやあねえ、お行懸てえやつさ」

「へゝエ」

「なにも驚かねえつたつて宜いやな、兎に角、熱くして早く一升、旦那が馬で先きへ行くのだから、肴は燒豆腐と、芋の煮ころがしでいゝから、丼を二つゝけて、早くしてくんな」

貧乏德利のまゝ熱燗の一升、丼に受けつゝ、息をも續がずあふりつけたる兩人、酒もぐも瞬く間に、飲み盡し食ひ盡した。伊助に云はれぬ間と、氣を利かした吉

藏は、戸外に立ち出で玉蟲の行先見屆ければ、まだ〳〵やつと二三丁、フラリ〳〵と馬が足を揚げる度に、彼方へよつたり此方へよつたりして居る。

「伊助、大丈夫だぜ、俺が今見たら、まだやつと二三丁しか、先へ行つてやアしねえ今飲んだのは、眞些の咽濡しだ、もう一升づゝやつて行かうて、何あに十丁や其處ら行れたつて、一走りだ、オイ〳〵爺さん、もう二升つけて呉れなそれからとな、饅鍋を二枚、何あに伊助、譯は無いつてことよ、まアさ、さう急がずと、おつと有難え酒も肴も來た、さ、やんねえ〳〵、ね、やつて呉れねえつてことよ」

云はれて見ると、伊助とて、酒と來ては目のない方、吉藏は固より藩邸で猖々親爺の綽名を取たゞけ頻りとあほりつけたのが都合三升の熱燗、大きに腹の工合も宜くなつて、頬のあたりが、カーッとして來ては、さう水を飲むやうには行かぬので、鍋を平げ、德利を寢かしつけるまで、今で云ふと、彼れこれ三十分

時も懸つたか、

「さあ頭、急いで行かう、ウイー、いゝ心持になつた奴さ、エ、、イ、ゲップ」

「そいぢやア一ッ、出掛けるとしようかいウ、、イ、べら棒に醉つたて」

一分の額一ッ、投げ出した伊助、殘餘は年首だ、年玉だと、ゲップまじりに云つた吉藏、繩暖簾潜つて出た槍合羽籠の、まだ七八間も行かぬうち、往來俄に騷がしくも、罵り走る士農工商、

「若黨さんも、隨分えらい人だつたが、可哀さうに遂々返り撃になつて仕舞つた、多兵衞さん、お前は始めから見たと云ひなさるが、一體どういふ原因で、馬のお武家が斬られたんだい」

「こう云ふ譯さ、七藏さん、あの合羽坂の下から、最前、馬のお武家が、おつ恐さうな風で、やつと坂の中ほどまで登つて來ると、坂の上から、降りて來たのは、百人町の劍術の先生と、弟子の有象無象二人、さうすると、すれ違ひざ

ま、何うしたのか、馬が泥濘へ足を突込んだからバチャーリ、堪らない、飛泥が上つて、剣術の先生の頭から羽織まで、泥だらけにして了つたが馬のお武家は、氣が附かないと見えて、挨拶もせず其のまゝ行き過ぎたので、剣術の先生は怒つたね、で、後から追つ掛けざま無禮者ッと云ふより早く、袴の裾を押へてずる〳〵ずるッ、引き摺り落したから、馬のお武家は、何するッと云つて、刀の柄へ手を懸けやうとする、其の間もあらせず、やッと一聲、抜き打ちにスパーリやつちまつたのさ、所へお武家の若黨さんが飛んできて、主人の讐敵と剣術の先生に斬つて掛ると、可哀さうに固より技倆が違はアね七八合目に受け損じて、眉間を一太刀浴せられ、撓む所を二人の弟子が、左右からスパーリ斬り附けて、滅茶苦茶に斬りさいなんだ上、自身番へ上つて、威張つて居たが何でもまだ居やアがるだらうよ、何にしても氣の毒なものさ、何處のお武家だか知らないが……」

晴天の霹靂、此の話を聞いた伊助吉藏が胸には早鐘のやう、ヤーことときたかと思ふと、吉藏が顔色は、見る〳〵蒼白になつて了つた、しかし流石は伊助、心に決する所あつてか、

「頭、あの話しでは、玉蟲の旦那が殺害れたに違ひねえと、私あ思ふが今になつてはもう仕方がねえ、私あこれから乘り込んでのるか反るか、敵の侍に戰闘らなけりやあなるめえと考へる、就いちやあ頭、濟ねえがお前はこれから引返して、お月番へ注進して來て下せえな」

「ナニ、敵を打つ、馬鹿な事をするもんぢやあねえ、こう伊助、先方は武士が三人、此方は手前一人ぢやあねえか、それで敵討をするなんて、手前、途方もねえ事をするもんぢやねえ、百七十二文で命を棄てる阿呆もあるめえに……」

「ウンニヤ、構ふ事あねえ、一日でも私が主人とした人の其の敵、旦那が殺されて、家來が默つちやあ居られねえ、私が今日、合羽籠を擔いで來たのなら、

濟して私あ構はず居るが、何は兎もあれ武士の表道具、槍を持つて來たんだに此の儘濟して、私あ構はねえと言つちやあ、淺野家の名折れだ、憚んながら淺野の仲間には、三度飯を食つて血の通つてゐる者があると言はれりやあ、御家中御一統までの名譽だ、私あ何所までも、玉蟲の旦那の敵打をしてやるよ」

「い、、それも尤もだが、伊助、お前ばかり敵討に出して、俺がおめ〳〵歸邸れるもんぢやあねえ、死ぬも生るも、なあ伊助、かうなつたら一所にして呉れ三文奴でも頭と言はれるこの吉藏、未練があつちやあ、ヘン、お前の言草ぢやあねえが、藩邸の名折れだ、注進はめしやの親爺に賴んで、一足後から俺も行くから、急いで呉んな、伊助、はやく賴むぜ」

「頭、よく言つて呉れた、義を見て爲ざるは勇なきなりだ、一所に行かう、そして一所に死なう、が、なあ頭、私も一つ賴みがある、ほかぢやあねえ、此の私も、これから出掛けて行つて、先の奴等と戰るんだが宜いか頭、お前、なんだ

せ、俺が殺られつちまうまで、決して出て呉れちやあ不可ねえぜ、え頭」

「ウン、よしきた、確かに承知した、決して出やあしねえから、早く賴む」

「おつと合點だ、それなら頭」

「おゝさ、拔かるな伊助」

合羽坂の上下には、黑山の樣な人だかり、己がまに〳〵物知り顏に、饒舌り散らすもあれば、罹難れた武士の藩邸の詮議をするもある後から身寄の者の來て、また斬合の起るのを待受けて居る者も、中には呑氣に立ち混つてゐる。斯かるところへ坂下のかた、俄にどよめき渡つて、見物の口々、

「やあゝ來た〳〵」

「ソラ、大きな强さうな奴さんが來たぞ」

「屹度あの人が敵討をするに違いない」

「おや〳〵、あれは兩國橋で、武士三人を手玉にとつた天狗樣だ」